

1992年11月25日 発行

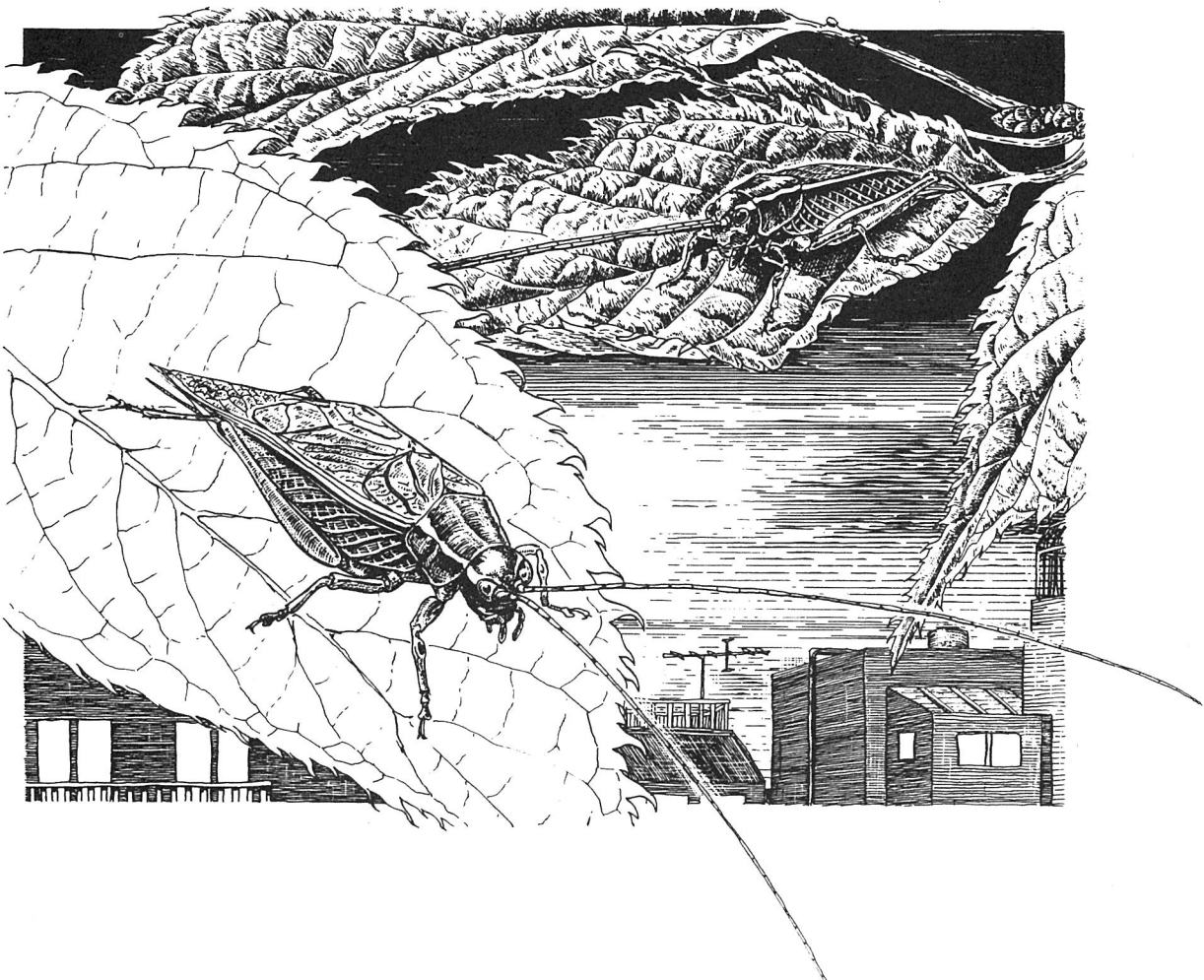
ISSN 0917-5695

埼玉昆虫談話会

# 寄せ蛾記

yosegaki

65号



表紙デザイン：小堀 文彦

## 渡 正監と「日本蝶類図説」

大野 正男

昭和28年2月、元上海警視総監 渡 正監 が、55才の若さで没してから40年の才月が過ぎた。中学生の頃から蝶の研究に熱中、大学は東大法学部政治学科を卒業、全く畑違いの方向に進みはしたが、東京をはじめ大阪・和歌山・静岡・千葉・福島・青森など、県庁を中心に日本各地を転々としながら、最後まで蝶を忘れなかった偉大なアマチュア蝶研究家の一人である。

そのぼう大なコレクションは林 慶・中原和郎など、著名な研究者のそれとともに、現在は国立科学博物館に保存され、その全貌に接することができ、その人となりや蝶研究の内容についても、磐瀬太郎 (1951, 1962)、江崎悌三 (1956)、長谷川 仁 (1967) などの紹介文があるので、これまたその一端を知ることができる。

しかし、標本コレクションの規模に比し、著作の方はあまり多くなかったためか、最近では正監の名を知る人も少なくなった。やがては忘れ去られる蝶研究者の一人かもしれない。

筆者は個人的なつながりをもたなかったのに、正監を語る資格はないが、昭和20年代、縁あって正監旧蔵の「日本蝶類図説」を、神田の古書店で入手した。この図説は正監の旧蔵本というだけでなく、手あかによる汚れ具合、整本のいたみなどから、また年代の異なる2種の蔵書印が押されていること、内容への書き込み量の多いことなどから、永年にわたる愛蔵本と見なすことができ、正監の一面を知る重要な資料のひとつになるのではないかと考えられるので、ここにその概要を紹介したいと思う。

宮嶋幹之助が動物学雑誌に連載した内容を基礎に「日本蝶類図説」(成美堂・目黒書店)を刊行したのは明治37年7月10日である。明治19~22年、横浜で発行されたプライヤーの「日本蝶類図譜」がその前にあるので、日本の蝶類図鑑としては宮嶋図説が最初ではないものの、プライヤーの図譜の普及度に比すれば格段の差があり、明治~大正期、本邦の蝶研究に与えた影響は非常に大きく、当時として画期的な図鑑であったことは衆目の一致するところである。

正監がこの図説を入手したのは発行の翌年、明治38年、正監16才のときであった。墨で黒々と書かれた署名がそれを物語っている(図1)。正監はこの図説をくり返し、くり返しひもとき、採集した標本と比較しながら日本の蝶に関する基礎的知識を身につけて行ったのであろう。数年後(大正9年)、東大法学部の学生になった正監は、若き時代の磐瀬太郎を従えて東大理学部のにり込み、この宮嶋幹之助をはじめ、波江元吉・三宅恒方などが蒐集した蝶標本の保存状態の悪いのを嘆き、ボランティアとしてその整理・補強に当たったといわれているが(江崎悌三, 1956)、こうした行動をとった背景のひとつに、宮嶋図説の影響があったのではないかと思える。

手あかで汚れ、整本のいたみが激しいことはすでに述べたが、正監は、図説にない種が新たに発表されるとその種名を該当ページに書き込み、新しい産地が報告されるとそれにより分布の項を訂正(宮嶋による分布の誤記の訂正も含む)追加し、幼虫や食草に関する新しい知見もそれを該当欄に書き加えるということをしている。特に蝶の鱗粉転写法については3ページにわたり、その概要が余白に書き加えられているといった状況である。おそらく正監にとってこの宮嶋図説は、かなり長期にわたって座右の書であり、バイブル的存在だったのであろう。

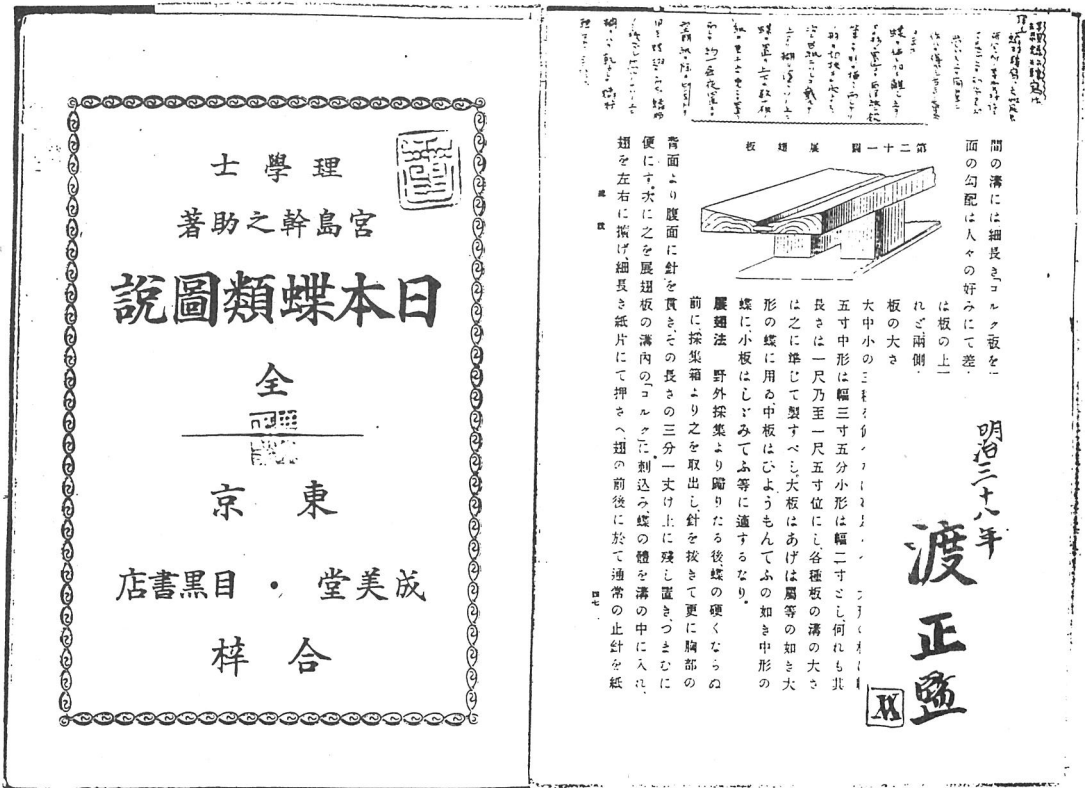


図1. 左：正監旧蔵本の扉。2種の蔵書印が押されている。  
 右：正監による書き込みの1例と図説購入時（16才）の署名。

そして特に注目すべきは、こうした書き込みの中には、単に他書や雑誌の報文などから得た知識だけでなく、正監自身の観察による内容も含まれていると思える点である。どれが引用で、いずれが正監の観察の内容か、厳密には区別できないが、こうした書き込みのいくつかを摘記してみよう。

1. だんだらてふノ産地 (p. 81) 武蔵高尾山ニハ *L. japonica* 多産ス。四月頃採集ニ行ケバ多ク取レル。中ニハ日ニ約五六十尾得ベシ。
2. ひめぎふてふ *Ludorfia puziloi* (宮嶋図説にはない) (p. 81) 産地：本島 (山形)。だんだらてふトハ黒色ノ條ノ細キト形小ナルトニヨリ異ル。
3. あさぎまだらの仔虫 (p. 97) 淡青ニ淡黄紋ト有シ、前方ト後方トニ各2本ノ肉質突起ヲ有ス。かもめづるヲ食ス。
4. いしがけてふ (p. 116) 生態：山間溪谿ノ密林中ニ多ク飛翔シ、常ニ高キ樹梢ヲ飛ビ、ソノ状こみすじニ似タリ。多ク樹葉ニ静止ス。山国川ノ上流英彦山ニ多シ。卵：桶形ヲ呈ス。仔虫：緑色ニシテ頭部ニ2突起アリ。背部ニモ突起ヲ有シ、いぬびは、おほばいたび等ノ葉ヲ食ス。
5. ほしみすじノ産地 (p. 130) 摂津武田尾。
6. おほいちもんじノ産地 (p. 134) 本島 (信濃高山)
7. くもまべにひかげ *Erebia ligea* (図説になし) (p. 156) 期節：七八月。産地：本州 (信州 駒ヶ岳・ハケ岳・白馬岳等)

8. たかねひかげ *Oeneis jutta* (図説になし) (p. 156) 期節：七八月。産地：本州 (信州蓮華岳・赤岳・葉師岳・常念岳・ハケ岳等)
9. くろしじみ (p. 172) 英彦山ノ高原ノ秋草咲キタル所ニ多ク飛翔シ、ソノ飛翔遅緩ナリ。
10. うらぎんしじみ (p. 176) 高樹上ヲ飛ビ、飛翔又迅速ナレドモ直チニ樹葉ニ静止スルニヨリ捕獲困難ナラズ。溪畔ニ多シ。
11. みどりしじみ (p. 180) 表面黒色ニシテ前翅ノ後縁辺リ美紫色ヲ呈シ、中室前端橙赤色ヲ呈スル♀アリ。産地：六七月ノ頃、中野附近ノ榎樹ニ集リ、梢上ヲ飛ブモノ多シ (オオミドリシジミと混同している? 大野)
12. うらくろしじみノ産地 (p. 187) 本島 (山地一日光・御岳)
13. きまだらりつばめ *Aphaneus takanonis* (図説になし) (p. 188) 産地：本島 (兵庫・鳥取・岐阜県等)  
——— 以下省略 ———

終戦で内地に引きあげた正監は、あるいはこれから本格的に蝶の研究をやろうと思っていたかもしれない。しかし肝臓ガンという病魔は正監の体をむしばみ続け、ついに再起の機会を与えてくれることはなかった。当時の「虫界速報」誌は“元上海市警視総監 渡 正監氏は永らく病氣御療中の処、2月7日午前10時25分、肝臓ガンの為死去された。享年55才。告別式は9日午後1時より2時迄、東京都港区麻布笄町の自宅で執行された。”と報じている。

#### 付1) 渡 正監の蝶類関係著作目録

(正監の著作は白水 隆：日本産蝶類文献目録で概要を知ることができるが、これに脱落しているものもあるので、改めて全著作のリストを作成した)

1929. 日本の高山蝶. 山岳, 32(2) : 192~217, 5 pls. (日本山岳会の機関誌に発表された正監の処女論文で、また代表作。図2を参照)
1929. 日本産蝶類の変種異常型及新産地. 動物学雑誌, 41(486) : 185~189
1930. 東京附近の蝶類ファウナ. *Zephyrus*, 2(2) : 79~90
1932. ウスイロオナガシジミの二新型に就いて. *Zephyrus*, 4(4) : 235~237, pl. 17
1934. フタヘヨナガアゲハ、クロホシウスバシロテフ及びシロモンゴイシジミに就いて. *Zephyrus*, 5(2/3) : 64~67
1934. 那須の *Zephyrus*. *Zephyrus*, 5(2/3) : 143
1935. *Zephyrus* 属数種に就いて. *Zephyrus*, 6(1/2) : 42~44
1935. オホームラサキ電燈へ来る. *Zephyrus*, 6(1/2) : 127
1936. 日本産 *Limenitis* の一亜種について. *Zephyrus*, 6(3/4) : 175~177
1936. *Zephyrus* 二異常型の暗化型. *Zephyrus*, 6(3/4) : 189, pl. 11
1936. モンキアゲハの異常型に就いて. *Zephyrus*, 6(3/4) : 190, pl. 12
1936. 本邦産小灰蝶科の分布北限について. *Zephyrus*, 6(3/4) : 191~194
1937. 本邦産 *Lycaena euphemus* の一亜種. *Zephyrus*, 7(1) : 26~28
1937. スギタニルリシジミ青森県梵珠山に産す. *Zephyrus*, 7(1) : 68
1939. 高山蝶を追うて. 「自然科学の旅」 : 77~79 (日本旅行協会)

- 1941. 注目すべき房総半島の蝶相.  
Zephyrus, 9(1) : 14~15
- 1942. 台湾産蝶類新異常型.  
Zephyrus, 9(2) : 70~72, pl. 6
- 1951. 梵珠山のスギタニルリシジミ.  
Mikabo, 2(5) : 8
- 1952. 大先輩蝶を語る.  
新昆虫, 6(1) : 35~38
- 1952. ハリフウチョウソウを食べたモン  
シロチョウ幼虫. 新昆虫, 6(1) : 51
- 1953. 外国産蝶標本写真説明.  
新昆虫, 6(2) : 10~11

付2) 渡 正監の

人物紹介・追悼関係資料目録

- 江崎 梯三 (1956) 尾高朝雄さんと渡 正監  
さんへの追想.  
新昆虫, 9(10) : 10~12
- 長谷川 仁 (1967) 明治以降物故昆虫学関  
係者経歴資料集-日本  
の昆虫学を育てた人々.  
昆虫, 35(3) : 1~98,  
4 pls. (該当ページ:  
95~96)
- 磐瀬 太郎 (1951) 渡 正監氏の紹介.  
Mikabo, 2(5) : 8
- 磐瀬 太郎 (1962) 渡 正監さんと石村 清  
さん. 青森の蝶,  
4(2) : 12~14
- 白水 隆 (1985) 渡 正監. 「日本産蝶  
類文献目録」:  
782~788 (北隆館)
- 無 名 子 (1953) 渡 正監氏の訃.  
虫界速報, (28) : 8
- 無 名 子 (1953) 渡 正監氏の訃.  
新昆虫, 6(3) : 18

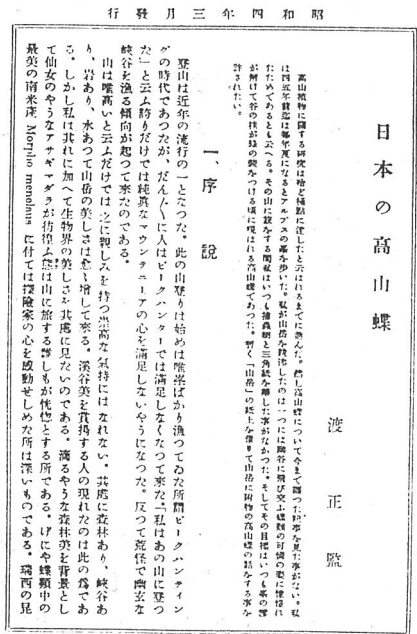


図2. 「新昆虫」に載った正監晩年の写真(上)と、処女論文冒頭のページ(下)

.....

# 三品川（埼玉県寄居町）における トンボの生息分布

## I. 初夏～盛夏の調査

新井 裕

.....

流水性トンボの中には、オジロサナエやヒメサナエのように産卵水域よりかなり下流で大量に羽化するものが知られている（新井, 1989 ; 1991a, 1991b）。

これは、幼虫が上流から下流に流下するためと考えられるが、それが幼虫自身の自発的な移動行動によるものなのか、増水時に押し流された結果生じるものなのかを明らかにすることは生物学的に重要な事項である。また、最近では平地や丘陵地を流れる河川に生息する流水性のトンボの減少が著しく、ハグロトンボやコシボソヤンマといった普通種が、現在では絶滅が心配される程に激減し、その保護対策が緊急の課題となっている。流水性のトンボの減少の原因としては、河川の埋め立てや暗渠化、水質の汚染や周辺環境の悪化のほか、最近盛んに行われているコンクリート護岸の影響も大きいと予想される。

筆者は、オジロサナエ幼虫の流下現象の解明と、コンクリート護岸された川でのトンボの生息状況を知るため、20年近く前に護岸工事が施された埼玉県大里郡寄居町の三品川で調査を行った。以下、初夏から盛夏にかけておこなった調査の結果を報告する。

### 調査場所と方法

三品川は、埼玉県寄居町を流れる流長約3km、川幅1～3mの荒川水系の小河川で、東秩父村オヤノタ峠に源を発し、約1.9km下ったところで平倉川と合流し、落合橋付近で深沢川に注いでいる。源流から500m程下ったところに高さ15m程度の堰堤があり、その直下からは全て両岸がコンクリート護岸されている。源流から堰堤まではヒノキ林で囲まれた山地溪流的景観を呈しているが（写真1-I）、堰堤の手前は深さ1m程のすり鉢状のよどみとなっており、堰堤の側面にある2か所の穴によって通水している（写真1-G）。堰堤から下流700mまでの区間は、河床もコンクリート化されており、その上を滑るように水が流れている（写真1-F）。そこから下流は深沢川との合流部付近（写真1-A）を除いて自然状態となっており、所々に土砂が堆積した岸辺が形成されており、アシやミゾソバ等の雑草が生育している（写真1-E）。三品川の支流である平倉川は川幅1～2mの小さな沢で、両岸はコンクリート護岸されているが、河川は一部区間を除いて自然状態となっている（写真1-L）。三品川、平倉川共に高さ1～2mの堰が10m程度の間隔をおいていくつも設けられており、この水は周囲の水田のかんがい用水として利用されている。また、三品川及びその支流にはいたるところにアブラハヤやサワガニが生息しており、水質は比較的良好である。

図1 調査場所の概要 (点線は兩岸コンクリート, 実線は三面コンクリート張りを示す)

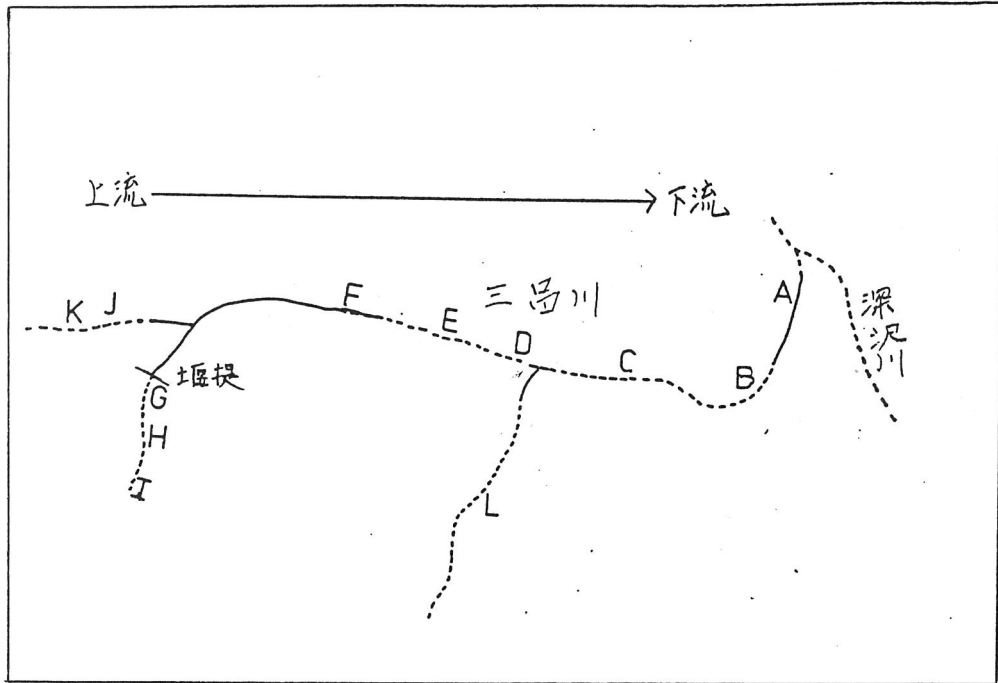
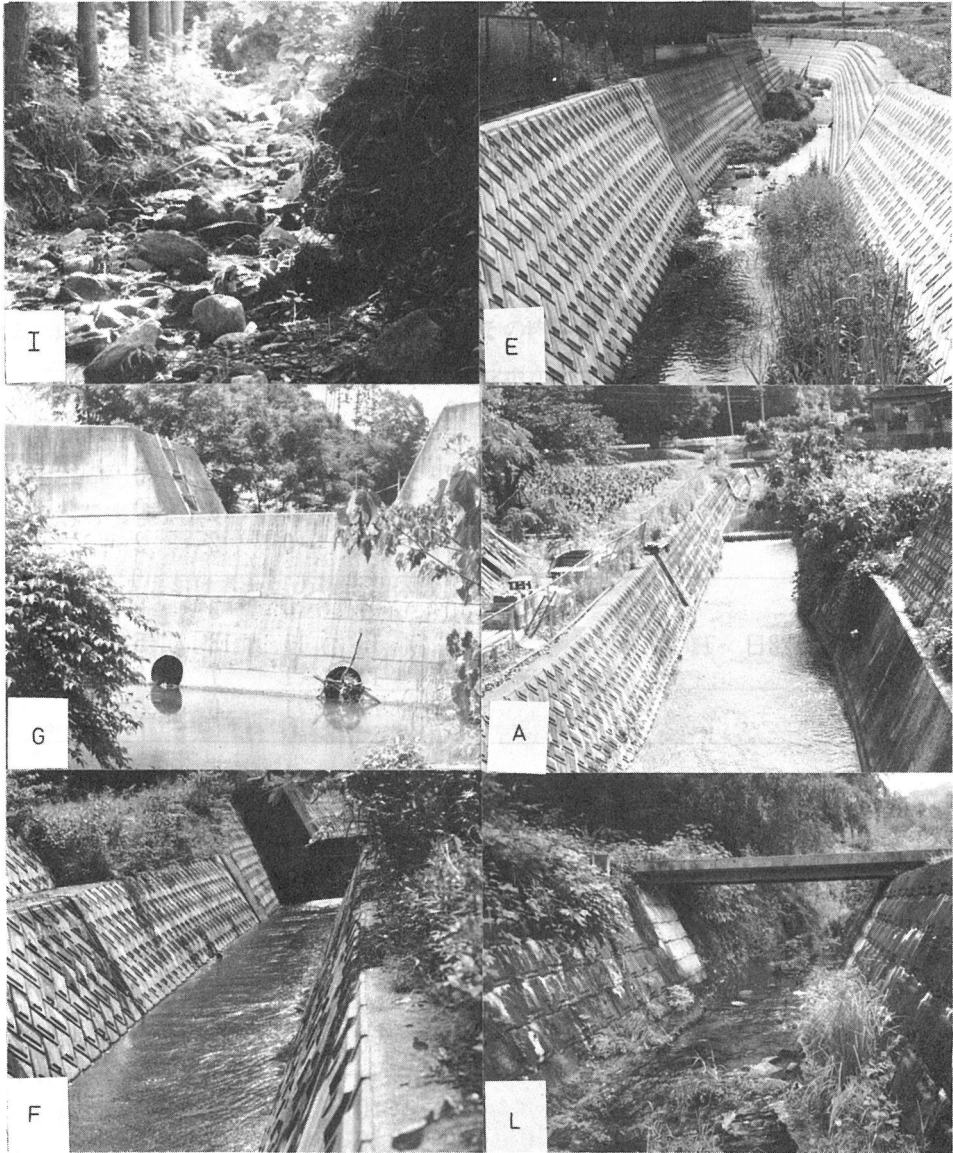


表1 三品川及びその支流の調査区間の状況

区 間	区間距離(km)	河床の状態	成熟トンボ成虫の確認種
A~B	0.2	コンクリート	ミヤマカネ・コオニヤンマ・オニヤンマ
B~C	0.7	砂礫, 砂泥	ミヤマカネ・コオニヤンマ・オニヤンマ
C~D	0.5	小礫, 砂礫	ミヤマカネ・コオニヤンマ・オニヤンマ・ハグロトンボ
D~E	0.3	砂泥, 砂礫	ハグロトンボ・コオニヤンマ・オニヤンマ
E~F	0.2	砂礫, 小礫	コヤマトンボ・コオニヤンマ・オニヤンマ
F~G	0.9	コンクリート	コオニヤンマ
G~H	0.1	砂泥	死ドサエ・ヤマサエ・コオニヤンマ・カトソボ・ミヤマカトソボ・オニヤンマ・ゴソボヤンマ
H~I	0.4	礫, 岩	カワトンボ・オニヤンマ
J~合流	0.1	コンクリート	な し
J~K	0.2	礫	カワトンボ・オニヤンマ
D~L	0.5	砂礫, 砂泥	オシロサエ・コオニヤンマ・オニヤンマ・ハグロトンボ・ミヤマカトソボ・ミルヤンマ・ゴソボヤンマ



写真1 調査地点の景観（記号は調査地点を示す）



調査場所は表1及び図1に示したA~Lの12地点とし、各地点で幼虫のサンプリング調査を行うと共に、成熟成虫の生息の有無を観察した。幼虫の調査は目の細かいザルを用いて一地点につき40~50分採集を行った。採集した幼虫は、オジロサナエについては前報(新井, 1991a)と同様、羽化殻、終齢、壮齢、中齢、若齢に分類し、ほかは種別に個体数を記録したのち元に戻した。調査は、1992年6月14日、6月21日、6月28日、7月4日、7月11日、8月8日、8月15日、8月16日、8月27日の9回行った。

結果と考察

1. オジロサナエの生息分布

オジロサナエ幼虫の調査結果を表2に示した。三品川では羽化殻か羽化直前の終齢幼虫はF地点を除

表2 オジロサナエのヤゴの生息状況

調査日 (1992年)	調査地点	齢別確認幼虫数 (頭)				
		羽化殻	終齢	壮齢	中齢	若齢
6月21日	A	18	10	0	0	0
	B	5	4	2	3	0
	C	3	5	2	3	0
	D	24	3	1	0	0
	I	0	9	0	2	2
6月28日	I	0	7	0	3	0
	H	0	13	11	13	5
	G	0	14	1	7	8
	E	14	1	1	0	0
7月4日	J	0	0	1	1	0
	K	0	3	2	4	5
	E	16	4	4	13	1
7月11日	A	0	0	0	0	0
	B	1	0	0	0	0
	E	2	0	0	0	0
8月8日	L	0	0	12	46	22
8月15日	D	0	0	8	4	3
	E	0	0	6	5	2
	F	0	0	0	0	0
	J	0	0	0	0	0
	H	0	0	5	4	2
8月16日	A	0	0	0	0	0
8月27日	L	0	0	11	35	23

いた全域でみられた。A地点では多数の羽化殻が得られたにもかかわらず、羽化直前以外の幼虫は全くみられなかった。同様に、三面コンクリート化されているG～F間も羽化殻、幼虫共に全くみられなかったが、河床のコンクリートが終わった直後の場所からは羽化殻が認められた。一方、成熟雄のなわばり行動や雌の産卵は三品川本流ではどこでも観察されず、それがみられたのは支流の平倉川のみで、ここでは若齢から壮齢までの幼虫が多数生息していた（羽化時期には調査を行わなかったため、羽化場所や終齢幼虫の生息状況は不明である）。このように下流部では羽化殻や終齢幼虫は多いにもかかわらず、若～中齢幼虫が認められなかったことは、羽化に先立って幼虫が支流を含む上流部から流下していることを示すと同時に、それが増水時によっていろいろなステージの幼虫が押し流される結果にもとづくものではないことを意味している。恐らく本種の流下は、増水時の受動的なものもあるであろうが、幼虫自身の積極的な流下行動が主なものになっていると思われる。

## 2. 他のトンボの生息分布

オジロサナエ以外に認められた幼虫は8科14種で、その内訳は表3に示したとおりである。得られた幼虫の中には、アオイトトンボ科の一種（オツネイトンボかホソミオツネイトンボ）、ギンヤンマ属の一種（多分クロスジギンヤンマ）、オオイトトンボ、シオカラトンボなどの止水性種も含まれていた。このことは、この川が場所によって流れが弱く、止水的環境となっていることを示すものである。これら14種のうち最も分布域が広く、個体数も多かったのはダビドサナエで、次がオニヤンマであった。ま

表3 各調査地点におけるヤゴの確認個体数

種名\調査地点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
ダビドサナエ	4	3	8	22	多	3	20	—	—	1	3	多
ヤマサナエ	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—	3
コオニヤンマ	—	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
カワトンボ	—	—	—	—	—	—	—	—	14	5	3	1
ハグロトンボ	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
オオイトトンボ	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
アイトトンボ科の1種	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—
コヤマトンボ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
ミルンヤンマ	—	—	—	—	—	—	—	2	1	1	2	2
コシボソヤンマ	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	1
オニヤンマ	—	2	—	多	—	—	—	16	10	—	6	7
ギンヤンマの1種	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
シオカラトンボ	—	3	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
ミヤマアカネ	2	多	2	1	7	—	—	—	—	—	—	—

※ 多：25頭以上確認

—：1頭も確認せず

た、ミヤマアカネは流れが緩やかな雑草の茂った岸辺に限って多数生息していた。カワトンボは、上流部にのみ生息していたが、川の護岸工事が行われる直前の17~18年前には下流のC地点付近に極めて多数生息していたのを記憶している。水質的には今日でもC地点にも生息が可能と思われるのに、何故上流部に追いやられてしまったのであろうか？

最近、本種は羽化直前になると上陸して水際の小石の下などに潜伏することが明らかになったが(新井, 1992), 両側護岸による岸辺の消失によって上陸行動を阻害されたことが減少の一因となっているかもしれない。

最近激減傾向にあるコシボソヤンマやハグロトンボは、生息範囲が限られてはいるものの、健在であった。このことは、両側護岸が行われても河床が自然に保たれ、周辺の環境も残されていれば、これらの種の生存が可能であることを示すものである。また、表2や表3で示されたとおり、わずかに距離が異なっただけで生息する種構成や個体数は大きく変化している。このことは、ほんのわずかな環境の違いがトンボの生息にとっては大きな意味を持つことを示すもので、川の持つ多様性を損なうことが生物相への大きな悪影響を招くことになる。川の三面コンクリート化は、単純化の最たるもので、少なくとも河床のコンクリート化だけはぜひとも避けてもらいたいものである。

## 引用文献

- 新井 裕 1989 : オジロサナエは川を下るか. インセクトarium, 27 : 84-87.  
——— 1991a : オジロサナエは川を下るか (続報). 月刊むし, 239 : 23-26.  
——— 1991b : 越辺川本流の昆虫 (トンボ). 越辺川, 154-170.  
——— 1992 : 羽化が近づくと陸上で過ごすカワトンボ. インセクトarium, 29 : 213.

(あらい ゆたか ☎369-12 大里郡寄居町末野 1233-1)

.....

## パソコン使用による個人標本データベース私案

井上 尚

.....

はじめに

1984年発行の「寄せ蛾記43」には星野正博氏の「ムシ屋とパソコン」という報文がのせられているが、考えてみればこの年が今日のパソコン時代の到来が本格的に予想され始めた年ではなかっただろうか。そういう中での同氏の「先見の明」は高く評価すべきと筆者は考える。筆者も当時既にパソコンのユーザーとなりつつあったが、その時の技量ではパソコンをワープロとして利用するのが精一杯であり、それ以外の活用方法など全く考えつかない状態だった。しかし現在では一応各種文献／書籍から得た知識により、BASICはほとんど不自由なく使用できるまでになり、1990年には主成分分析のプログラムをFORTRANから移植して主にカラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハの翅型分析に使用開始した。更に1991年にはそれまでワープロのプログラムで作成していたアゲハ属の標本データベースファイルをランダムアクセスファイルに置き代えると同時に、このデータベースファイルのメンテナンス用プログラムを同じくBASICで作成し、本年1月1日より完全にこのシステムに移行させるに至っている。

本文章はこのうち後者のデータベース管理プログラムの概要を公開することによって、同様の計画を持たれている方の便宜を図ると共に、今後の個人データベースの相互利用を出来るだけ促進できるような環境を提案する目的で執筆するものである。文中、プログラム言語など、一見難解な用語も出現するが、多少ともコンピュータを操作していればすぐに理解できるものと思うので、あまり深刻にならずに読んでいただきたい。

なお同様の提案は既に「やどりが139」において、倉茂 秀明 他3名の方によるものが提案されているが、筆者が今回紹介するものは、このシステムとはかなり設計思想が違うようであり、できれば両者を比較されながら読んでいただければと思う。

開発に当たったの基本姿勢と仕様

今回は次の点に留意しつつ開発を行った。

1. 他の方とのデータ交換を容易にするため、現在最も普及しており、かつ学習が容易と思われるBASICによる自主開発のプログラムを開発／使用する。
2. データベースに書き込む内容を極力絞こむ。個々の標本に関連の薄い学名命名者名、命名年、記載文献資料などは全て無視する。種名も単なる記号として扱い、地名／国名も出来るだけ簡略化する。
3. 少しの手直しにより、他の目的（名簿管理、書籍管理等）へ転用できるよう、また将来の拡張も考え、構造化、サブルーチン化に努める。
4. 他人が本プログラムを使用する場合を考え、画面表示等も一応考慮する。

以上の点についてもう少し説明すると、1. で市販プログラムを敬遠したのはそれらのアプリケーション

ンが作成するデータファイルの構造解析がやっかいなことがあること、コスト的な問題があること、融通性やユーザー拡張性に難点があること等を考慮したため、また最近批判されることの多いBASICを敢えて採用したのは、サンプルプログラムを掲載した書物がなお大量に発行されていること（今回紹介のプログラムもこうしたものをアレンジして作成した）、学習しやすく、またそれぞれのコマンドや文にほとんどの場合デフォルト値が決まっているため操作しやすいこと（例えばFORTRANやCでは印刷の書式をいちいち全部指定しないと動かないが、BASICでは”LPRINT（変数/定数）”とすれば、自分に都合のいい形になるかどうかは別にしても、とにかく印刷される）、また最近ではどのメーカーのものでもインタプリタとコンパイラの両方が揃っているので、インタプリタ→デバッグ、コンパイラ→高速実行、という機動性が発揮できるなど、なお魅力的/実用的な言語と判断したためである。

2. は大型電子計算機やメインフレームではなく、メモリー量や処理速度の点でなお厳しい部分の多いパソコンを利用することを前提にしたために必要になった事項で、フリーエリアやディスクの最大限の有効利用を考えた結果である。ただし、各項目の記号化にあたっては極力既存のものを流用するようにした。3. については出来るだけ汎用性を持たせることにより、今後同様の専用データベースプログラムを開発した際に、それらの操作性を出来るだけ統一させるためである。なお4. については特に説明の必要はないだろう。

### 具体的なデータ量の割り振りと記述方法

以上の観点よりこのデータベースでは一標本当たりの総文字(バイト)数=フィールド長 を128とし、これを各項目に以下のように割り振った。

種名=6, 性別遺伝型=4, 採集/累代別=2, 標本形状=4,  
 国籍=4, 地名記号=12, 採集/羽化日=8, 採集/飼育者=22  
 地名=32 備考=34 以上128

以下、これらについて簡単に説明する。

1. アゲハ属(今回はMUNROEのリストからマネシアゲハ属(五十嵐, 1979.), 南米産の一部, アフリカ産の一部を外した)の種名を調べた結果、先頭から6文字までを取った時、重複するのは4種2組のみであり、しかもそのうち1種(machaon)以外は全て狭小域分布種だったので、広域分布種の一部としても国名で区別できるため、この方法によって重複を排除した。従って今回のデータベースでは全ての種を6文字表記とした(5文字以下の種の場合には空文字が6文字になるまで自動的に付加される)。なお亜種名は一切無視した。
2. 性別はMまたはFとし、越冬型の場合はそれぞれの小文字で示した。なおナガサキアゲハやフトオビアゲハのように♀又は♂が多型の場合は遺伝子記号を加えたが、これはパーソナルルールとした。また幼虫の場合は令数を、卵、蛹の場合はそれぞれE, Pを記入した。
3. 採集品/飼育品欄は、累代飼育か否かでまず分け、野外採集品の場合、成虫採集の場合はC, 蛹以前の段階の採集の場合はRとした。また累代の場合には一番最初の♀チョウからの代次回数を記入した。
4. 標本形状は1文字目が主たる標本の形状で、展翅標本=D 液浸標本=L 管瓶標本=T 全損廃棄=Nとした。また主たる標本以外にそれから分離した状態で保存されている部分がある場合には、脈相=V 交尾器=G 電顕写真=E等の記号を2~4文字目に作成順に並べた。なおこれらの部品標本の標本番

号は「主たる標本番号+形状記号」とし、抜け番を容認している。

5. 国籍は書籍等で利用されているISO 3166-1981を一部変更の上、暫定的に使用した（ロシア関係で今後若干の変更が必要になるため）。なお飼育品ではこの部分を交配パターンを示す欄として使用している。交配パターンコードの1文字目は、国籍コードの1文字目としては全く使われていないXから始めた。
6. 地名コードは1/100万国際図の区画割りによって1段階目の絞り込みを行い、続いて国籍欄に示した国で使用されている国土基本図を基準にしての絞り込みを行った。日本のJIS規格では1/2.5万地形図を使用しているが、ここでは1/5万地形図を使用し、最大で東西方向南北方向共に角度にして1'、石垣島での実長が1.8km×1.9kmまでの絞り込みに成功した。ただしこうした地図がない国については、暫定的に1/100万国際図と国際航空地図による絞り込みを行った。なお、累代飼育標本の場合は、この欄は直前の母チョウの標本番号（幼虫で譲渡の場合は提供者氏名）欄とした。
7. 日付は年数4桁、月は16進数による1桁、日は2桁とした。8桁めは採集時刻や、飼育品の羽化日を示す記号を書き込む欄として使用した。
8. 採集者欄は、採集品については採集者名、飼育品については主たる飼育者名とした。いずれも漢字併用とし、またローマ字氏名の場合は、名字の先頭文字=2バイト大文字+それ以降1バイト大文字、名前=1バイト大文字+1バイト小文字と表記した。なお漢字、ローマ字いずれの表記の場合も名字と名前の間は1バイトのスペースを入れた。
9. 採集地欄は、地図記号での表示が検索の際にかえって不合理になる場合があり、こうした際の補助データ欄として設定した。離島は国内外を問わず必ず記入し、また外国の場合は州、県、半島、高原名などを出来るだけ記入することにした。その他、具体的な地名はその土地が含まれる基本地図の図幅名+採集地点の現地での名称とし、日本及びその付近では漢字主体とした。なお採集品については、母チョウの出所や飼育経過を自由に略記する欄とした。
10. 備考欄は採集品については参考資料を、また飼育品については食草などを記入する欄として使用した。
11. あるディスクファイル中の全標本データに共通するデータについてはディスクのリザーブ領域に記入しておき、必要な時に「DSKI\$」文で読み出して使用する。こうすれば標本の登録数を減らすことなく必要な補助データを書き込める。

以上の仕様により現在最も普及している1MBのフロッピディスク1枚当たりの標本記入件数は約9000となるが、これは倉茂氏 他 の提案したプログラムの場合の約2800件の3倍となっている。この理由は筆者のプログラムがアゲハ属という誰の目にも明かな生物群を対象にしているため入力データを徹底的に切り詰められたのに対し、倉茂氏らのものは汎生物用のもののためこれ以外にも様々なデータが必要であり、その切り詰めが容易でなかったためと考えられる。

## プログラムの概要

以下、プログラムの具体的な仕様について説明するが、リストをそのまま紹介してもあまり得るところはないと思われるので、大まかな流れを示すことにする。もし、リストの必要な方は、筆者まで紹介していただきたい。

今回のプログラムではとりあえず、データの書き込み/修正、と台帳作成を行えるようにした。予定としては検索、地図パターンとの合成 という辺りも目標にしているが、現在筆者が使用している機種では少々厳しいものがあるため、この部分については近々予定しているシステム交換後に本格的な設計作業に入る予定である。

## 1. 標本データの新規登録/修正

このルーチンの基本的な設計仕様は次の通りである。

- (0). 必要な配列、文字列を定義し、メモリー領域を確保する。メニュー画面をディスプレイへ展開し、データ操作/台帳作成の選択を要求する。「データ操作」を選択すれば本項(1). 以下の部分に流れる。台帳作成については次項に示す。
- (1). 書き込み/修正を行う標本番号をキーボードから入力する。標本番号をディスクのリザーブ領域に置いたデータと照合し、このディスクに書き込める範囲の番号かどうか判断する。もし適合しない場合は再入力を要求するか、ディスクの交換を要求する。
- (2). 標本データファイルをオープンし、現在の最終標本番号を読みとる。入力した番号と最終標本番号を比較し、最終標本番号の方が大きい場合はデータを読み出す(→(3). へ)。そうでない場合は新規登録として扱う(→(4). へ)。
- (3). 読み出したデータが空文字だった場合は新規登録として扱う(→(4). へ)。そうでなければデータの修正として扱う(→(5). へ)。
- (4). 新規登録の場合、今まで登録したデータの中で、その一部を修正すれば新しい標本のデータとして使えるか、又は番号が違うだけで全く同じものがある場合には、その番号を入力して内容を読み出し、新しい標本の参考データとして入力の際に使用する。ない場合には空文字を入力し、参考データは空のままとする。
- (5). 修正の場合は指定された番号の標本データを読み出し、参考データとする。
- (6). 画面にメッセージ/参考データを表示し、1項目(=1フィールド)づつ入力する。空文字が入力された場合には参考データをそのまま標本データとする。また空文字列を入力する場合は、ダブルクォート「"」に続けて必要な数だけスペースを入力する。最後に確認を求め、Yなら終了、Nなら再入力とする。
- (7). 別のデータを操作するかどうか尋ね、Yなら(1). へ戻す。Nならファイルをクローズしてメニュー画面(0). に戻す。

以上である。従来はこうした手続きは四角や菱形を線でつないだものが使われていたが、最近の「C」その他の構造化言語の普及により、文章のまま書いた方がプログラミングしやすくなったのですたれてしまった。

このプログラムでは新規登録と既存のデータの修正を、書き込み番号の大きさとデータの有無により総合して判断し、新規登録の場合には別に参照データを拾ってきて、そのデータがそのまま使える場合はリターンキーの入力のみで完了するようにするなど、既存のデータへの誤記入をなくし、かつ入力の手間をできるだけ省けるようにしたのが特徴である。なおデータ内容を点検するのは、ある標本番号を飛び番にしたまま進ませ、後でその抜け番号に記入する時の便宜を図ったものである。



## 2. 台帳印刷

こうして作成したデータベースファイルの中身は確認のため、あるいは万が一のディスクの破壊に備えるために、紙に印刷した状態で保存しておきたい。そのために台帳作成のためのルーチンを作成した。

- (1). データファイルをオープンする。
- (2). プリンタに文字間隔, 行間隔, 文字種類指定等, 必要な制御文字列を送る。
- (3). 印刷を行う標本番号を入力する。標本番号の点検は前項(1). に準ずる。
- (4). 入力された番号から, その標本が含まれるページの先頭の標本番号を計算し, 印刷する標本番号の範囲を特定する。
- (5). ファイルから印刷範囲の標本データを読み出す。
- (6). 標本1個のデータを1行毎に印刷し, 1ページ分全部のデータを印刷するまで続ける。
- (7). プリンタ初期化制御コード, 改ページ文字列を送る。
- (8). 別ページを印刷するかどうか尋ね, Yなら(2). へ戻す。Nならファイルをクローズしてメニュー画面(前項(0).)に戻す。

台帳を作る場合, 1ページに1頭分の標本データのみしか印刷しないということはまず有り得ない。従ってこのプログラムでも印刷が必要な標本を含む1ページ分の標本データ全てを自動的に印刷するように工夫した。なお筆者の場合, 台帳用紙はB 4横置き, 1ページ内の標本頭数は32頭としており, これから改行ピッチ, 文字ピッチを割り出して, プリンターをコントロールしている。

印刷に関してはこれで充分ではないかと思う。カード型印刷等も必要ではないかと思いの方もいるかも知れないが, これは検索プログラムがしっかりしていればそれで解決する問題と思ひ, 今回は考慮しなかった。どうしても必要な場合でもこのプログラムを細工すれば簡単に作れるので, その時になったら考えることにしている。

### おわりに

以上が現在稼働しているシステムだが, ご覧の通り, まだまだ不備な物であり, 今後ともできるだけ改良に努めていく。なお既に別のシステムを稼働させている方がおられれば是非とも参考にさせていただきたいので, 私信なり, 投稿論文なりで, 筆者に御教授下されれば幸いである。

## 八潮市の汽水域に生息する甲虫類

ハマベミズギワゴミムシとヤマトヒメメダカカッコウムシについて

雛倉 正人

八潮市は埼玉県の南東部に位置し、中川を境に三郷市に接している。この中川の河川敷の八潮市側にはアシ原が広がり、潮位の変動による影響を大きく受ける。当地は、満潮時にはアシ原は水没し、長靴でも入れない程の深さとなる。一方、干潮時には、アシの根ぎわの砂が露出し、狭い干潟のようなものが形成される。この湿地帯は特に冬季に水鳥が多く、また無数のカニが生息していて、人が近づくと大きな音をたてる(カニがはい回る音である)。満潮時にはこれらのカニが水中を泳いでいたり、アシの茎に登っている姿がよく見られる。カニの同定はしていないが、千葉県木更津のアシ原塩性湿地に生息するかなり大型の種と同じものようである。昆虫では、ヒヌマイトトンボの生息が特筆される(碓井, 1991)。このトンボは、河口付近の海水と淡水が混じる汽水域に生息するという特殊な生態を有し、東南アジアのマングローブ湿地近傍に生息する種に近縁だと考えられている。なお、ヒヌマイトトンボは、環境庁のレッドデータブックでは絶滅危惧種として扱われている。このように当地は、海なし県埼玉としては、他に例を見ない特異な自然環境を有する。河川敷の堤防側は畑やグラウンドに変わっており、岸にはマリーナが造成されている所もある。また周囲の住宅地から流入する生活排水や、廃棄物の不法投棄により、少なからぬ影響を受けていると思われる。筆者は、当地の自然環境に興味を持ち、甲虫類の探索を試みた。その結果、掲題2種の興味深い甲虫類を採集したのでここに紹介したい。

ハマベミズギワゴミムシ *Bembidion semiluitum* BATES (写真1)

data: 八潮市大瀬 4 exs. 3. I. 1992 (石下で越冬中), 同地 7 exs. 12. IV. 1992

八潮市南川崎 2 exs. 12. IV. 1992 いずれも雛倉採集, 保管。

本州と九州から知られ、関東からは、東京湾および九十九里浜に流入する河川の河口部(東京都、千葉県)と、神奈川県の小田原で得られている(笠原, 1982; 笠原, 1984; 平野, 1981)。茨城県の海岸からは未記録だが、外見と生息場所の似たハマベゴミムシが那珂湊市から記録されている(笠原・西山, 1990)。今回の記録は埼玉県としてだけでなく、関東の海岸線から離れた分布としても他に例がないと思われる。河口付近のアシ原の地表に生息している。おそらく、荒川、江戸川、隅田川の下流部の低湿地には、都市化が進む以前には、河口からやや内陸まで広く生息していたのだろう。

ヤマトヒメメダカカッコウムシ *Neohydnum hozumii* NAKANE (写真2)

data: 八潮市大瀬 1 ex. 6. VI. 1992

東京都葛飾区大場川 4 exs. 16. VI. 1991 (参考記録) いずれも雛倉採集, 保管。

本属 *Neohydnum* は、東洋熱帯から多くの種が知られている。本種はこの属の中では最北に分布する種であり、名古屋市河口付近のアシ原で初めて発見された。関東では多摩川の河口付近が多産地として知られ(新里, 1984)、埼玉県では荒川流域の戸田市道満で記録されている(長谷川, 1989)。最近千葉県の利根川流域からも記録された(我孫子市環境保全課, 1992, (株)緑生研究所の西村正賢らの調査

による)。ヨコモンキバネカッコウムシともいう。アシの茎や葉を活発に動き回り、小昆虫を捕食するらしい。

[引用, 参考文献]

我孫子市環境保全課 (1992) 我孫子市昆虫類目録. 我孫子市自然環境調査昆虫調査報告書, 101-194.  
 碓井徹 (1991) 埼玉県では記録の少ないイトトンボ科5種の記録. 寄せ蛾記, 61: 1176-1177.  
 長谷川道明 (1989) 戸田市の甲虫類. 戸田市動物誌, 151-181, 戸田市立郷土博物館.  
 平野幸彦 (1981) 神奈川県 of 甲虫. 神奈川県昆虫調査報告書, 233-372, 神奈川県教育委員会.  
 環境庁編 (1991) 日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - (無脊椎動物編)  
 pp. 37-38, (財)日本野生生物研究センター, 東京.  
 笠原須磨生 (1982) 千葉県の歩行虫類. 千葉生物誌, 32(1): 1-35.  
 ——— (1984) 大田区の歩行虫類. 大田区の昆虫, 大田区自然環境保全基礎調査報告書, 63-72.  
 笠原須磨生・西山明 (1990) 茨城県の歩行虫. るりぼし, 15: 1-62.  
 黒沢良彦ほか (1985) 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ), 保育社, 大阪.  
 新里達也 (1984) 大田区の甲虫類. 大田区の昆虫, 大田区自然環境保全基礎調査報告書, 41-61.  
 上野俊一ほか (1985) 原色日本甲虫図鑑(Ⅱ), 保育社, 大阪.

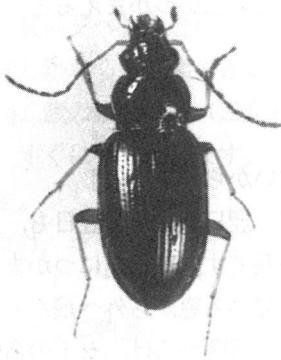


写真1

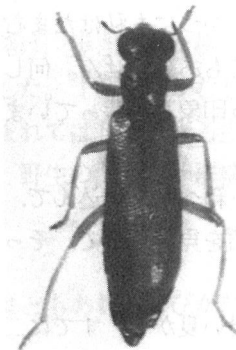


写真2



ハマベミズギワゴミムシ ●と  
 ヤマトヒメメダカカッコウムシ ▲ の関東での分布

.....  
たまむしとぴかぴかむし中川 利勝  
.....

## 1. たまむしの章

先日、道路地図を引っぱり出してみていたところ、地図の間から、一枚の絵が出てきました。愛娘ゆき（長女）が四歳の夏に描いた、たまむし（ヤマトタムシ）の絵でした。思えば、一昨年の夏は、二人でよく、浦和の大崎公園に、たまむしをつかまえに出掛けたものでした。実は、大崎公園の奥に、たまむしの集まるエノキの大木があるのです。何しろ、大木なものですから、継ぎ竿を使うのですが、それでもやっと届くか届かないかのところを、たまむしは例によって、体を垂直にして、エノキの葉のまわりを飛び回ります。七月のかんかん照りの時が、たまむしの活動時間です。なかなかつかまらないたまむしに向かって、娘はしきりに、

「おーい、たまむしさーん、下りてきてェ！！」

と、小さな体で叫んだものでした。その願いが届いたのか、やっとのことで私がかかまえると、目をまるくして驚いていました。よほど不思議な色の虫だったのでしょう。

「ゆきちゃん、たまむしさん大好き」

理由は、顔がかわいいからだそうです。

「それに、くわ<sup>た</sup>む<sup>し</sup>（クワガタムシのこと）と違って、かみつかないから好きなの」

生まれて初めて、虹色のたまむしを手にした我が家のお姫様のために、翌日も、その翌日も、炎天下のたまむし狩りにお供することになってしまいました。ノルマは一日一匹です。三日前につかまえた一匹にいたっては、勇んで家にもち帰り、部屋の中で放したとたん、開いている窓から外へ飛んで行ってしまい、当の本人は口をポカんと開けたまま、ア然とするばかりでした。周囲からは、セミの合唱にまじり「アッホ」の大合唱。たまむしは、昔から縁起のよい虫である上、筆筒に入れておくと衣装が増える、という迷信があったので、我が家でも、ムシとはいえ歓迎されたものでした。

こうして、この年の夏は、二匹のたまむしを飼うことになる訳ですが、うかつにも私はたまむしの飼育法を知らなかったのです。早速、駅前の本屋さんへ駆け込んだのは言うまでもありません。何しろ、私の子供時代の記憶では、たまむしは何も食べず、すぐに死んでしまうという印象しか残っていませんでしたから。

結局、数日後、不幸にも死んでしまったたまむしを、大切そうにオモチャ箱へしまい込んで、ひどくご満悦そうな娘でしたが、私は内緒で、彼女が忘れたであろうと思われる頃を見計らって、そっと土に帰してやることにしました。

童心にかえり、娘と共に、二十数年ぶりでたまむしを追いかけた、あの暑い夏から、すでに二年がたちました。その彼女も、最近昆虫よりもリカちゃん人形に夢中です.....

## 2. ぴかぴかむしの章

昨年七月のある晩のことです。所用で千葉へ出掛けた帰り道、偶然にも、市川市大町自然観察園の前を車で通過しました。入り口に、確か『ホタル鑑賞の夕べ』だったと思いますが、大きな立て看板が目飛び込み、思わず車を付近にとめて、吸い込まれるように立ち寄ってしまいました。入り口の受付に、お兄さんが待機していましたので、私は、つい無粋にも、

「養殖もののホタルですか？」

と、尋ねてしまいました。彼は、地元の昆虫同好会かなにかに所属していた方で、ニコニコしながら、

「ここに、昔から自然状態で発生しているホタルです」

と、丁寧に教えてくれました。自然のホタルの乱舞を目にするのは、私自身、十七年程前に、友人と二人で、オオイチモンジを求めて、島々谷の岩魚留小屋へ行った時、降りしきる雪のような夥しい数のホタルに感動して以来です。この市川市大町自然観察園については、昨年、ネオゼフィルス第26号に、岩阪佳和さんが、ミドリシジミの豊産地ということで紹介されていたのを思い出しますが、実は、ヘイケボタルの生息地として有名だったようです。

この年の夏、我が家では、アニメの名作『火垂るの墓』のビデオを娘たちに見せたばかりでしたので、アフターサービスということで、本物のホタルを知らない娘たちをひき連れて、再度大町自然観察園へ出掛けることにしました。しかし、残念なことに、出掛けたのは八月に入ってからになってしまい、『ホタル鑑賞の夕べ』も最終日間近になっていました。七月に下見したときとは違い、八月のホタルは申し訳程度しかおらず、実のところ、探すのに苦労してしまいました。

当時二歳の娘のにき(二女)は、何をかくそう、現代版『虫愛づる姫君』のようで、昆虫を見たと興奮し、すぐに手を出します。以前も、飼育中のコクワガタの♂に無謀にも手を出し、噛まれた前歴があります。

彼女は、ホタルが点滅しながら飛んでゆく姿を見るや、指をさしながら、

「あっ！ こうき！ こうき(ひこうきのこと)！」

と、しきりに興奮していました。ホタルの光が、夜間飛行をする飛行機の、点滅するランプに見えたのだと思います。「ぴかぴかむし」と母親に教えられて、自分に言いかすかのように、何度も口ずさんでいました。

帰路は、歩き疲れた様子の二女を背にして帰った訳ですが、数分もしないうちに、背中で眠ってしまいました。「ぴかぴかむし」の夢でもみていたのでしょうか。

生まれてはじめて光る虫を見て、娘たちも驚いたことでしょうか、私も、東京にこんなに近い市川市内で、野生のホタルが群棲するところがあったなどとは思ってもよらなかったもので、驚きもひとしおでした。

何はともあれ、「ぴかぴかむし」の見頃は、やはり七月がよいようです。

## 寄居町中小前田付近の蛾 (その2)

内田 正吉

寄居町大字桜沢字中小前田にて採集した蛾類を本誌 NO. 55に引き続き報告する。今回報告する蛾類は主に、1989年の春から秋にかけて中小前田にある自宅にて夜間灯火に飛来したものである。標本は市川和夫氏に同定いただき、最新の学名と本県未記録種についても御教示いただいた。市川氏に心よりお礼申し上げる。

採集データのあとに (未) とあるのは、埼玉県未記録と思われる種であることを示す。採集は全て筆者による。標本も全て (ハゴロモヤドリガ lex. を除く) 筆者が保管している。

### マグリガ科 Incurvariidae

- 1 ケブカヒゲナガ *Adela nobilis* CHRISTOPH  
lex. 27. v. 1985 (未)
- 2 ホソオビヒゲナガ *Nemophora aurifera* (BUTLER)  
lex. 22. vi. 1986 (未)
- 3 クロハシシロヒゲナガ *N. albi antennella* ISSIKI  
lex. 7. v. 1983

### ハマキガ科 Tortricidae

- 1 リンゴノコカクモンハマキ *Adoxophyes orana* (FISCHER VON ROSLERSTAMM)  
lex. 8. vi. 1986
- 2 コシロアシヒメハマキ *Hystrichosolus spathanum* WALSHINGHAM  
lex. 22. v. 1989
- 3 ウスシロモンヒメハマキ *Notocelia autolitha* (MEYRICK)  
lex. 4. vii. 1989 (未)
- 4 マメサヤヒメハマキの一種 *Matsumuraeses* sp.  
lex. 3. iii. 1983 ; lex. 3. iv. 1983

### ヒロズコガ科 Tineidae

- 1 デコボコヒロズコガ *Hapsifera barbata* (CHRISTOPH)  
lex. 2. viii. 1989 (未)

### ハモグリガ科 Lyonetiidae

- 1 ハモグリガの一種 (ヒサカキハモグリガ?) *Lyonetia* sp.  
lex. 28. v. 1984

### マルハキバガ科 Oecophoridae

- 1 カノコマルハキバガ *Schiffermuelleria zelleri* (CHRISTOPH)  
lex. 10. v. 1984
- 2 ヒラタマルハキバガの一種 *Agonopterix* sp.  
lex. 18. iii. 1985

カザリバガ科 *Cosmopterigidae*

- 1 カザリバガの一種 *Cosmopterix* sp.  
lex. 6. vi. 1985

セミヤドリガ科 *Epipyropidae*

- 1 ハゴロモヤドリガ *Epiricania hagoromo* KATO  
3ex. 22. ix. 1989 自家の蚕室の窓ぎわで得られたものである。9月の頃に桑園にて採桑作業を行うと本種に寄生されているベッコウハゴロモやスケバハゴロモをよく見かけるので、これらは桑園から蚕室に持ち込まれた桑葉に付着していたマユから羽化した個体と思われる。なお、3個体のうち1個体は市川和夫氏が保管されている。

イラガ科 *Limacodidae*

- 1 ムラサキイラガ *Austrapoda nitobeana* (MATSUMURA)  
lex. 4. vii. 1989

メイガ科 *Pyrallidae*

- 1 クロスカシトガリノメイガ *Cotachena alysoni* WHAKKEY  
lex. 11. vii. 1989 (未)
- 2 ウスムラサキシジノメイガ *Clupeosoma cinereum* (WARREN)  
lex. 4. vii. 1989
- 3 シロオビノメイガ *Hymenia recurvalis* (FABRICIUS)  
lex. 25. ix. 1989
- 4 コブノメイガ *Cnaphalocrocis medinalis* (GUENEE)  
lex. 8. xi. 1989 夜間, ヒヨドリバナの一種に訪花。
- 5 モモノゴマダラノメイガ *Conogethes punctiferalis* (GUENEE)  
lex. vi (中旬). 1989
- 6 ワタノメイガ *Notarcha derogata* (FABRICIUS)  
lex. 24. ix. 1989
- 7 タイワンモンキノメイガ *Syllepta taiwanalis* SHIBUYA  
lex. 10. ix. 1989
- 8 マエアカスカシノメイガ *Palpita nigropunctalis* (BREMER)  
lex. 29. ix. 1989,  
lex. 5. xi. 1989 夜間, ヒヨドリバナの一種に訪花。
- 9 ヨツボシノメイガ *Glyphodes quadrimaculalis* (BREMER & GREY)  
lex. 11. vii. 1989
- 10 スカシノメイガ *G. pryeri* BUTLER  
lex. 22. v. 1989
- 11 マメノメイガ *Maruca testulalis* (HUBNER)  
lex. 23. viii. 1989
- 12 マエキノメイガ *Herpetogramma rudis* (WARREN)  
lex. 16. ix. 1989
- 13 キムジノメイガ *Prodasynemis inornata* (BUTLER)  
lex. 19. viii. 1989
- 14 フキノメイガ *Ostrinia scapularis subpacificata* MATSUMURA & MUNROE  
lex. 15. vi. 1989 ; lex. 3. ix. 1989
- 15 クロモンキノメイガ *Udea testacea* (BUTLER)  
lex. 8. xi. 1989. 夜間, ヒヨドリバナの一種に訪花。

- 16 ウスチャオビキノメイガ *Yezobotys dissimilis* (YAMANAKA)  
lex. 7. vi. 1989 (未)
- 17 ヒメトガリノメイガ *Anania verbascalis* (DENIS & SCHIFFERMULLER)  
lex. 2. viii. 1989
- 18 ヒメマダラミズメイガ *Elophila turbata* (BUTLER)  
lex. 3. ix. 1989 ; lex. 16. ix. 1989
- 19 フタスジツヅリガ *Eulophopalpia pauperalis* (LEECH)  
lex. 2. viii. 1989 (未)
- 20 ツヅリガ *Paralipsa gularis* (ZELLER)  
1 ♀ 1 ♂ 4. vi. 1989 ♀は新築されたばかりの家屋内を飛翔していたものであり、♂は人の住んでいない家屋(蚕室兼物置となっている)の外に面した戸に静止していたものである。本種は6月の頃に自宅の納屋などで時々見られる。
- 21 ナカアオフトメイガ *Teliphasa elegans* (BUTLER)  
lex. 3. ix. 1989
- 22 ミドリフトメイガ *Trichotophysa jucundalis* (WALKER)  
lex. 12. vii. 1989 (未)
- 23 コメノシマメイガ *Aglossa dimidiata* (HAWORTH)  
lex. 21. vii. 1989 これも新築したばかりの家屋の室内にて得た。
- 24 フタスジシマメイガ *Orthopygia glaucinalis* (LINNAEUS)  
lex. 16. ix. 1989
- 25 トビイロシマメイガ *Hypsopygia regina* (BUTLER)  
lex. 23. viii. 1989
- 26 ウスオビトガリメイガ *Endotricha consocia* (BUTLER)  
lex. 4. viii. 1989
- 27 オオウスベニトガリメイガ *E. icelusalis* (WALKER)  
lex. 23. viii. 1989
- 28 サンカクマダラメイガ *Nyctegretis triangulella* RAGONOT  
lex. viii(下旬). 1985
- 29 マダラメイガ亜科の一種  
lex. 16. v. 1989 屋内にて採集。

## トリバガ科 Pterophoridae

- 1 エゾギクトリバ *Platyptilia farfarella* (ZELLER)  
lex. 20. viii. 1983 (未)

## トガリバガ科 Thyatiridae

- 1 ホソトガリバ *Tethea octogesima* (BUTLER)  
lex. 12. viii. 1989 ; lex. 19. viii. 1989

## シャクガ科 Geometridae

- 1 ヒメツバメアオシャク *Gelasma protrusa* (BUTLER)  
lex. 31. v. 1989
- 2 ナミスジコアオシャク *Diplodesma ussuriaria* (BREMER)  
lex. 18. vi. 1989 ; lex. 22. viii. 1989
- 3 ヨツモンマエジロアオシャク *Comibaena procumbaria* (PRYER)  
lex. vi(中旬). 1989 ; 1 ♀ 8. ix. 1989 本個体は採集直後に5卵ほど産卵したので容器に入れておいたところ、翌9日に14卵を産卵、10日には新たに25卵を産卵した。これらの卵のほとんどは9月13日に孵化したが、幼虫の飼育は残念ながら失敗に終わった。



- 4 クロモンアオシャク *C. delicatior* (WILEMAN)  
lex. 11. vii. 1989
- 5 コヨツメアオシャク *Comostola subtiliaria nympha* (BUTLER)  
lex. 21. v. 1989 ; lex. 31. v. 1989
- 6 フトベニスジヒメシャク *Timandra apicirosea* (PROUT)  
lex. 17. vii. 1989
- 7 ウンモンオオシロヒメシャク *Somatina indicataria morata* PROUT  
lex. 5. viii. 1989
- 8 マエキヒメシャク *Scopula nigropunctata imbella* (WARREN)  
lex. 31. vii. 1989
- 9 キナミシロヒメシャク *S. superior* (BUTLER)  
lex. 29. vi. 1989
- 10 ウスキクロテンヒメシャク *S. ignobilis* (WARREN)  
lex. 30. vi. 1989 ; lex. 30. viii. 1989
- 11 クロテントビヒメシャク *Idaea foedata* (BUTLER)  
lex. 16. ix. 1989
- 12 アトスジグロナミシャク *Epilobophora obscuraria* (LEECH)  
lex. 25. v. 1989
- 13 トビスジヒメナミシャク *Orthonama obstipata* (FABRICIUS)  
lex. 21. vii. 1989 ; lex. 5. viii. 1989
- 14 フタモンクロナミシャク *Microcalcarifera obscura* (BUTLER)  
lex. (1989年に採集したのだが、採集月日失念。)
- 15 オオハガタナミシャク *Ecliptopera umbrosaria* (MOTSCHULSKY)  
lex. 7. viii. 1989
- 16 セグロナミシャク *Laciniodes unistirpis* (BUTLER)  
lex. 10. ix. 1989
- 17 ナミシャク亜科の一種  
lex. 5. xi. 1989 夜、ヒヨドリバナの一種に訪花。
- 18 ウチムラサキヒメエダシャク *Ninodes splendens* (BUTLER)  
lex. 2. viii. 1989
- 19 フタテンオエダシャク *Chasmia defixaria* (WALKER)  
lex. 28. viii. 1989
- 20 クロハグルマエダシャク *Synegia esther* BUTLER  
lex. 28. viii. 1989
- 21 オレクギエダシャク *Protoboarmia simpliciaris* (LEECH)  
lex. 10. ix. 1989
- 22 ウスバミスジエダシャク *Hypomecis punctinalis conferenda* (BUTLER)  
lex. 4. viii. 1989
- 23 リングツノエダシャク *Phthonosema tendinosaria* (BREMER)  
lex. 6. vii. 1989
- 24 ヨツメエダシャク *Ophthalmitis albosignaria* (BREMER & GREY)  
lex. 21. viii. 1989
- 25 ヨモギエダシャク *Ascotis selenaria cretacea* (BUTLER)  
lex. 4. ix. 1989
- 26 ウスグロナミエダシャク *Phanerothyris sinearia noctivolans* (BUTLER)  
lex. 22. viii. 1989
- 27 クワエダシャク *Menophra atrilineata* (BUTLER)  
lex. 13. vi. 1989

- 29 エグリヅマエダシャク *Odontopera arida arida* (BUTLER)  
lex. 10. x. 1989 ; 2ex. 5. xi. 1989 夜, ヒヨドリバナの一種に訪花。  
30 ウスキツバメエダシャク *Ourapteryx nivea* BUTLER  
lex. 8. vi. 1989

ツバメガ科 *Uranidae*

- 1 ギンツバメ *Acropteris iphiata* (GUENEE)  
lex. 11. vii. 1989

カレハガ科 *Lasiocampidae*

- 1 オビカレハ *Malacosoma neustria testacea* (MOTSCHULSKY)  
lex. 21. vi. 1989

ヤママユガ科 *Saturniidae*

- 1 オオミズアオ *Actias artemis aliena* BUTLER  
lex. 28. viii. 1989

シャチホコガ科 *Notodontidae*

- 1 シャチホコガ *Stauropus fagi persimilis* BUTLER  
lex. 15. iv. 1989  
2 タカオシャチホコ *Hiradonta takaonis* MATSUMURA  
lex. 30. vi. 1989

ドクガ科 *Lymantriidae*

- 1 ヒメシロモンドクガ *Orgyia thyellina* BUTLER  
lex. 3. vii. 1989 ; lex. 21. viii. 1989  
2 モンシロドクガ *Euproctis similis* (FUESSLY)  
lex. 12. vi. 1989

ヒトリガ科 *Arctiidae*

- 1 モンクロベニコケガ *Stigmatophora rhodophila* (WALKER)  
lex. 7. vi. 1989 ; lex. 14. vii. 1989  
2 カクモンヒトリ *Thanatarctia inaequalis inaequalis* (BUTLER)  
lex. 17. ix. 1989  
3 クワゴマダラヒトリ *T. imparilis* (BUTLER)  
lex. 19. viii. 1989 ; lex. 23. viii. 1989  
4 キハラゴマダラヒトリ *Spilosoma lubricipeda* (LINNAEUS)  
lex. 6. iv. 1989

ヤガ科 *Noctuidae*

- 1 ナシケンモン *Viminia rumicis* (LINNAEUS)  
lex. 3. vii. 1989  
2 シマケンモン *Craniophora fasciata* (MOORE)  
lex. 4. vii. 1989  
3 カブラヤガ *Agrotis segetum* (DENIS & SCHIFFERMULLER)  
lex. 5. xi. 1989 夜, ヒヨドリバナの一種に訪花。  
4 クロクモヤガ *Hermonassa cecilia* BUTLER  
lex. 5. xi. 1989 夜, ヒヨドリバナの一種に訪花。

- 5 フタオビキヨトウ *Mythimna turca* (LINNAEUS)  
lex. 11.vi.1989
- 6 シロスジアオヨトウ *Trachea atriplicis gunama* (BUTLER)  
lex. 12.viii.1989
- 7 スジキリヨトウ *Spodoptera depravata* (BUTLER)  
3ex. 27.viii.1989
- 8 シロモンオビヨトウ *Athetis lineosa* (MOORE)  
lex. 27.viii.1989
- 9 フタテンヒメヨトウ *Hadjina biguttula* (MOTSCHULSKY)  
lex. 28.viii.1989
- 10 フサヤガ *Eutelia geyeri* (FELDER & ROGENHOFFER)  
lex. 29.iii.1989 屋内にて採集。
- 11 ベニモンアオリングア *Earias roseifera* BUTLER  
lex. 11.viii.1989
- 12 カマフリンガ *Macrochthonia fervens* BUTLER  
lex. 31.vii.1989 ; lex. 3.ix.1989
- 13 ヨモギコヤガ *Phyllophila obliterated* (RAMBUR)  
lex. 30.vi.1989
- 14 フタオビコヤガ *Naranga aenescens* MOORE  
lex. v~vi.1984
- 15 サビイロコヤガ *Amyna stellata* BUTLER  
lex. 12.x.1989
- 16 フタイロコヤガ *Acontia bicolora* LEECH  
lex. 30.vii.1985 ; lex. 11.viii.1989
- 17 ギンモンシロウワバ *Macdunnoughia purissima* (BUTLER)  
lex. 16.ix.1989
- 18 ウンモンツマキリアツバ *Pangrapta trimantesalis* (WALKER)  
lex. 6.viii.1989
- 19 オオシラナミアツバ *Hipoepa fractalis* (GUENEE)  
lex. 25.ix.1989

今回報告したのは19科105種であり、このうち13種(モモノゴマダラノメイガ、台湾モンキノメイガ、スカシノメイガ、ウスキクロテンヒメシャク、キナミシロヒメシャク、トビスジヒメナミシャク、オオハガタナミシャク、クロハグルマエダシャク、モンシロドクガ、キハラゴマダラヒトリ、クロクモヤガ、スジキリヨトウ、フサヤガ)は前回報告したものと重複する。なお、筆者は1989年以降も同地区において蛾類の採集を継続しているので、データがたまり次第報告したい。

# 埼玉県におけるエゾスズの分布

内田 正吉

エゾスズ *Pteronemobius yezoensis* (SHIRAKI, 1913) は全身光沢のある黒色で、体長6～7mmほどの小さなコオロギである。日本には北海道・本州・四国・九州に分布する。(九大の昆虫総目録には本種の分布は北海道と本州それから朝鮮半島だけ記されているのみであるが、四国からは市川(1987)が、また九州からは大塚(1982)がそれぞれ記録している。)埼玉県においては山崎(1978)が大滝村三峰及び同村栃本から記録している。また石沢(1992)は所沢市の鳴く虫のなかで本種をリストしている。筆者は県内各地において以下のとおり本種の生息を確認しているので報告する。採集地(生息環境)、採集個体、採集年月日の順に記す。なお、採集及び標本の保管は全て筆者による。

## [採集データ]

- 大滝村大滑、標高570m(中津川の河原に接した草地)、2♂、5.vii.1992  
 荒川村小野原(林縁の湿った草むら)、1♀、25.vi.1989  
 寄居町中小前田(休耕田に接した桑園の地表)、1♂、21.v.1989  
 寄居町 同上(水田の畦)、1♀、18.vi.1989  
 寄居町 同上(水田の畦に堆積された枯れ草の中)、2♂2♀、25.vi.1989  
 毛呂山町阿諏訪(低山地の沢沿いの地表)、1♀(幼虫)、27.v.1990  
 北本市石戸宿(湿地)、1♂、3.vi.1990 ; 1♂1♀、13.vi.1990  
 北本市高尾(林縁の湿った地表)、1♂、27.vi.1992  
 伊奈町小室(水田の畦)、1♀、18.vi.1991

本種は「ジー、ジー」と小さく地味な声で鳴くのであまり目立たない種であるが、県北西部の山地から丘陵地にかけては広く分布しているものと思われる。しかし平野部においてはどの程度分布しているのか、詳しいことはわからない。今後ともより一層のデータの集積に努めたい。

## [参考文献]

1. 市川 顕彦(1987) 梶ヶ森に行って来たのだ。ばったりぎす。74:5
2. 石澤 直也(1992) 所沢の鳴く虫について。寄せ蛾記。64:1338-1342
3. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター共編(1989) 日本産昆虫総目録。
4. 大塚 勲(1982) エゾスズ九州に産す。昆虫と自然。17(14):12
5. 山崎 柄根(1978) 埼玉の直翅類。埼玉県動物誌。383-401。埼玉県教育委員会。

.....

## 詩にあらわれた蝶 (2)

荒木 崇

.....

\* \* \* III \* \* \*

さて、今回は再び日本の詩を採ろう。

### 雷 蝶

三好 達治

雷の後 かみなり蝶が村へくる  
 村長邸の裏庭の 百合の花粉にまみれてくる  
 交番のある四辻で 彼女はちょいと路に迷ふ さうして彼女は風に揚る  
 椎の木よりもなほ高く 火ノ見槽の 半鐘よりもなほ高く

(「山果集」所収)

三好達治というと「土」という詩がよく知られているが、私はこれを採らない。あまりに人口に膾炙しているし、そのためか、新鮮さを感じることがないのだ。

三好達治は好んで蝶を題材とした詩を書いた。それも蝶を何かの象徴として使うというのではなく、目にふれた蝶そのものを描いたものを多く残している。ここに採ったものもそのひとつで、黒色アゲハのちょっとした生態をとらえながら、それを点景とした味わいのある田舎の風景詩となっている。この詩を含めて、三好達治は、カラスアゲハを夏の景物としてことのほか好んだようだ。例えば、「北の国では」(「日光月光集」所収)では、

北の国ではもう秋だ  
 あかのまんまの つゆくさの 鴉揚羽の八月は  
 秋は夏のをはりです

と詩い出され、「七月は鉄砲百合」(「百たびののち」所収)という詩では、

七月は鉄砲百合  
 烏揚羽がゆらりと来て  
 遠い昔を思はせる

に始まり、

まてしばし  
 烏揚羽がゆらりと来て  
 艶な喪服をひるがへす

と結ばれる。

この黒い蝶（アゲハチョウ）の翅に喪服をみるというモチーフは、「喪服の蝶」（「駱駝の瘤にまたがって」所収）という詩にも見られ、ここでは蝶を描くことから、「喪服の蝶」＝「哀しみ」という象徴化の方に詩のあり方が移っている。

三好達治はたしかにその詩において蝶そのものを描くことを多くしたが、一方で、「喪服の蝶」の場合のように、これを象徴として用いることもなかったわけではない。最後にそのような詩として「郷愁」（「測量船」所収）という初期の詩を引いておこう。

## 郷 愁

三好 達治

蝶のやうな私の郷愁！……。蝶はいくつかの籬<sup>いざき</sup>を越え、午後の街角に海を見る……。私は壁に海を聴く……。私は本を閉ぢる。私は壁に凭れる。隣の部屋で二時が打つ。「海、遠い海よ！ と私は紙にしたためる。————— 海よ、僕らの使ふ文字では、お前の中に母がある。そして母よ、仏蘭西人の言葉では、あなたの中に海がある。」

\* \* \* IV \* \* \*

さて、次は堀口大學の訳詩集「月下の一群」から採ることにしよう。「月下の一群」は上田敏の「海潮音」ととも名訳・名著の誉れ高い書であり、今日、ともに文庫本で手にすることができる。しかし、新潮文庫に入った「月下の一群」をひもといてみると、私は、これを文庫本で読めることの幸せと、文庫本によってしかこれと親しむことができない悲しみとをふたつながらに感ずる。本そのものに「香氣」を感ずることができないのだ。このような作品は、せめてもう少し美しい本で読みたいのだ。

## 昆 蟲 あ み

レーモン・ラディゲ

「蝶よ あんたは不人情よ！  
昨日からわたし追ひかけてるのに」  
途で行き逢った女生徒が  
かうつぶやいてをりました。

\*

## 毛 蟲

ギィヨーム・アポリネール

働く事は金持ちをつくる。  
貧乏な詩人よ、働かう！  
毛蟲は休みなく苦勞して  
豊麗な蝶になる。

\*

「月下の一群」に採られている詩人のうちで私が最も愛するのは、象徴派の詩人、ルミ・ド・グールモンである。そして私の収集品の中に、ぜひグールモンによる蝶の詩を、という切なる思いから、「月下の一群」はもとより、堀口大學「グウルモン詩抄」や、上田敏の「海潮音」、さらには「牧羊神」などにあたってみたのだが、ついに得られなかった。無念というほかない。ラディゲやアポリネールの詩を前にしてこんな繰り言めいたことをいうのも申し訳ない話しであるが、上に採った二編はいずれも堀口大學という人の興味（ボン・グウ）のある面を示すものであるが、やはり、別の重要な特質がそこには感取できない。そこで、「異例の反則」ではあるが、堀口大學がおそらくことのほか愛したであろう次の一編を、蝶とは何の関係もないけれど紹介することにしよう。

## 落 葉

ルミ・ド・グールモン

シモン、木の葉の散った森へ行かう。  
 落葉は苔と石と小徑を被うてゐる。

シモン、お前は好きか、落葉をふむ足音を？

落葉の色はやさしく、姿はさびしい、  
 落葉は儚く捨てられて、土の上にある！

シモン、お前は好きか、落葉をふむ足音を？

夕べ、落葉のすがたはさびしい、  
 風に吹き散らされると 落葉はやさしく叫ぶ！

シモン、お前は好きか、落葉をふむ足音を？

寄りそへ、われ等も何時かは、哀れな落葉であらう。  
 寄りそへ、もう夜が来た、さうして風が身にしみる。  
 シモン、お前は好きか、落葉をふむ足音を？

# 埼玉県産甲虫類の分布資料 [1]

小田 博

『埼玉県動物誌』(1978)以後、本県産の甲虫類の記録は熊谷市(1982)・所沢市三ヶ島(1984)・北本市石戸宿(1986)など各地の調査報告や市町村単位のもまとめが相次ぎ、かなりの種数が追加されつつあるものの、まだ調査の行き届かない科も少なくない。特にその傾向が顕著な雑甲虫や微小種を中心に、筆者が所持する若干の標本にもとづき報告することとする。本県産の甲虫相解明の一助ともなれば幸いである。今回はベニボタル科であるが、既発表[本誌(42):542]の記録も再録した。種名の後の※印は『埼玉県動物誌』に未記録の種。なお、採集品についてご協力をいただいた碓井 徹・内田正吉の両氏に深謝申し上げる。

## 《ベニボタル科 LYCIDAE》

1. ベニボタル *Lycostomus modestus* (KIESENWETTER)  
【秩父郡大滝村】三峰山, 1頭, 1. vii. 1984 [碓井 徹採集]; 大滑沢, 4頭, 5. vii. 1992; 大血川, 1頭, 5. vii. 1992.
2. クシヒゲベニボタル *Macrolycus flabellatus* (MOTSCHULSKY)  
【秩父郡大滝村】矢竹沢, 1頭, 30. vii. 1984.
3. ミヤマクシヒゲベニボタル *Macrolycus montanus* NAKANE ※  
【秩父郡長瀨町】岩田, 1頭, 23. vi. 1989 [内田正吉採集].
4. ホソベニボタル *Mesolycus atrorufus* (KIESENWETTER) ※  
【秩父郡荒川村】熊倉山, 1頭, 26. vii. 1984.
5. クロハナボタル *Plateros coracinus* (KIESENWETTER)  
【富士見市】上沢3丁目, 1頭, 14. vi. 1981 [小田 晶採集].  
【入間郡越生町】高取山, 1頭, 14. vii. 1982.  
【秩父郡大滝村】入川林道, 1頭, 25. vii. 1983 [小田 晶採集]; 川又, 1頭, 25. vii. 1983.
6. アカゲハナボタル *Plateros purpurivestis* GORHAM ※  
【秩父郡横瀬町】二子山, 1頭, 26. viii. 1991.
7. ヒメベニボタル *Lyponia delicatura* (KIESENWETTER) ※  
【比企郡小川町】天王沼付近, 1頭, 18. v. 1981.  
【秩父郡大滝村】秩父湖, 1頭, 14. vii. 1983.



8. カクムネベニボタル *Lyponia quadricollis* (KIESENWETTER)  
 【大里郡寄居町】深田谷津～馬騎ノ内, 1頭, 4. v. 1989 [内田正吉採集].  
 【秩父郡長瀨町】矢須那～野上下郷, 1頭, 6. v. 1990 [内田正吉採集].  
 【入間郡毛呂山町】阿諏訪, 1頭, 27. v. 1990 [内田正吉採集].
9. ニセジュウジベニボタル *Lopheros harmandi* (BOURGOIS) ※  
 【秩父郡大滝村】大峰, 1頭, 3. viii. 1991 [内田正吉採集].
10. コウノジュウジベニボタル *Lopheros konoi* (NAKANE) ※  
 【秩父市】武甲山, 1頭, 29. vii. 1992.
11. メダカヒシベニボタル *Dictyoptera oculata* (GORHAM) ※  
 【秩父市】武甲山, 1頭, 29. vii. 1992.
12. ヒシベニボタル *Dictyoptera gorhami* (KONO) ※  
 【秩父郡大滝村】秩父湖, 1頭, 14. vii. 1983.
13. ミスジヒシベニボタル *Benibotarus spinicoxis* (KIESENWETTER) ※  
 【秩父郡荒川村】熊倉山, 1頭, 22. vi. 1987.
14. テングベニボタル *Platycis nasutus* (KIESENWETTER) ※  
 【秩父郡荒川村】熊倉山, 1頭, 9. v. 1983.
15. スジアカベニボタル *Conderis orientis* GORHAM  
 【秩父郡大滝村】三峰山, 1頭, 19. vi. 1983 <注>; 矢竹沢, 1頭, 30. vii. 1984.  
 <注> 以前メダカヒシベニボタルとして記録した種[本誌(42):542, No. 12]は本種の誤りであったので, 訂正しておく.
16. クロアミメボタル *Xylobanus niger* OIBAYASHI ※  
 【秩父郡大滝村】滝川林道, 1頭, 25. vii. 1983 [小田 晶採集]
17. ネアカクロベニボタル *Cautires bourgeoisi* (HAROLD) ※  
 【大里郡寄居町】風布, 1頭, vii(下旬). 1986 [内田正吉採集].
18. マエアカクロベニボタル *Cautires zahradniki* (WINKLER) ※  
 【秩父市】武甲山, 1頭, 29. vii. 1992.

# 千葉県我孫子市でオオミドリシジミを目撃

板橋 一好

.....

筆者は、1992年6月27日8時20分より8時30分にかけて、我孫子市の古利根でオオミドリシジミ♀1頭を観察・撮影したので報告します。

当日は薄曇りで、同地のミドリシジミの観察・撮影のために6時40分ころより観察を開始した。8時20分頃、下草よりヒメウラナミジャノメと誤認する程度の大きさの褐色の蝶が飛び立ったが、飛び方が異なるので追跡したところ、湿った路肩にとまり吸水を始めた。この時に口吻が鮮やかな山吹色であることを観察した。

その後、撮影を続けたので、自然な行動とは異なる部分もあると思われるが、主として、日当たりの良い広葉の葉上にとまることが多く、カナムグラの葉上では口吻をのぼして吸水行動のような動作も見られた。ただし、葉表には肉眼で認められるほどの露はなかった。また、路上の発泡スチロールの破片で翅を開いて日光浴のような行動も観察された。

写真：

1992年6月27日  
8時25分頃  
我孫子市古利根  
筆者撮影



観察地点は高さ15m程度の急な斜面林下部で、上部の台地にはコナラ林が存在することから、このコナラ林が食樹ならびに生息環境として利用されていると推定される。

筆者は、同地の観察を数年続けているが、オオミドリシジミを確認したのは今回が初めてである。なお、筆者は寡聞にして同地の近隣地区におけるオオミドリシジミの分布状況や個体群密度についての知見を持たないので、読者のなかでご存じの方はご教示下されば幸いです。

(いたばし かずよし 〒270-11 千葉県我孫子市中峠 1837-2 )

# ミドリシジミ雌の多型現象の謎

萩原 昇

ミドリシジミ雌 (B型) が産んだ卵の飼育結果を報告します。

《母蝶について》 1991年7月1日、埼玉県蓮田市黒浜で採集したB型の1個体を、鉢植えのハンノキに網をかけ、野外で強制産卵させた。

《卵について》 全部で48卵産んだ。鉢をそのまま野外に放置し、自然状態で越冬させた。

《幼虫について》 卵は、野外で自然に孵化させたところ、100%孵化した。2令幼虫になってからは、ハンノキを室内に入れて飼育した。4令幼虫になってからは、3~5個体ずつプラスチックの容器に入れて飼育した。蛹化の直前に、軟腐病によって8個体が死亡。

《蛹について》 室内に放置し、羽化をまった。

《羽化した成虫について》

雄.....20個体

雌.....B型...16個体 (内、A斑のかすかに出現した個体が7個体)

AB型...2個体

O型...2個体 (内、A斑のかすかに出現した個体が1個体)

《羽化の経過》

1992. 5. 30.....12♂♂

31.....1♂

6. 1.....2♂

2.....3♂♂, 1♀♀ (AB型 1ex.)

3.....1♂, 3♀♀ (AB型 1ex. B型 2exs.)

4.....1♂, 5♀♀ (B型 4exs. O型 1ex.)

6.....6♀♀ (B型 5exs. O型 1ex.)

7.....3♀♀ (B型 3exs.)

8.....2♀♀ (B型 2exs.)

.....

## ジャコウアゲハ終令幼虫の観察から

萩原昇

.....

ジャコウアゲハをウマノスズクサにつけ、野外で飼育観察したところ、次のような行動が観察できましたので報告します。

1992年8月23日(晴れ)、前蛹になった幼虫の周りのウマノスズクサの葉が枯れかかっている事に気付きました。不審に思い、ウマノスズクサの茎を調べたところ、噛み切られていました(写真1)。翌24日にも同様の噛み切った跡を発見しました。

幼虫は、緑の葉の下で蛹化した個体(写真2)と、隣のツバキの枝で蛹化した個体と半々でした。茎の断面から判断して、ジャコウアゲハの幼虫が噛み切ったと断定して間違いありません。なぜ、このような行動をとるのか不明ですが、キシタアゲハの仲間でも、食草の茎を噛み切って蛹化する事が知られているそうです。



写真1



写真2

.....

## 越谷市でスジボソギンヤンマを採集

西田 彰

.....

筆者は、越谷市内において、通称スジボソギンヤンマを採集したので報告する。

採集場所：越谷市船渡

採集日：1992年8月6日

採集個体：1♂ (写真1.2 参照)

採集場所は水田であるが、8月いっぱいには水が張ってあるだけであった。同地には、オオイトトンボ・ギンヤンマ・コフキトンボ・ショウジョウトンボ・チョウトンボなどが生息しており、これらの種の縄張り飛翔や交尾・産卵行動も見る事ができる。当日は、この地で午前9時頃、チョウトンボを観察中に、筆者の目の前、水面から高さ約2mのところを偶然通過した本個体を採集した。

採集個体の形態を若干記録しておく。

体長：8cm. 後翅長：4.9cm.

額の紋：T字型ではないが、ギンヤンマに比べて接近している。

複眼の色：濃い緑色で、クロスジギンヤンマに類似する。

胸側黒条：細く、完全。

翅の色彩：基部1/3を除いて黄色部が広がる。

肢の肢体：全体が黒色で、クロスジギンヤンマに類似する（日浦（1968）と異なる）。

腹部斑紋：黒色地に青紋。

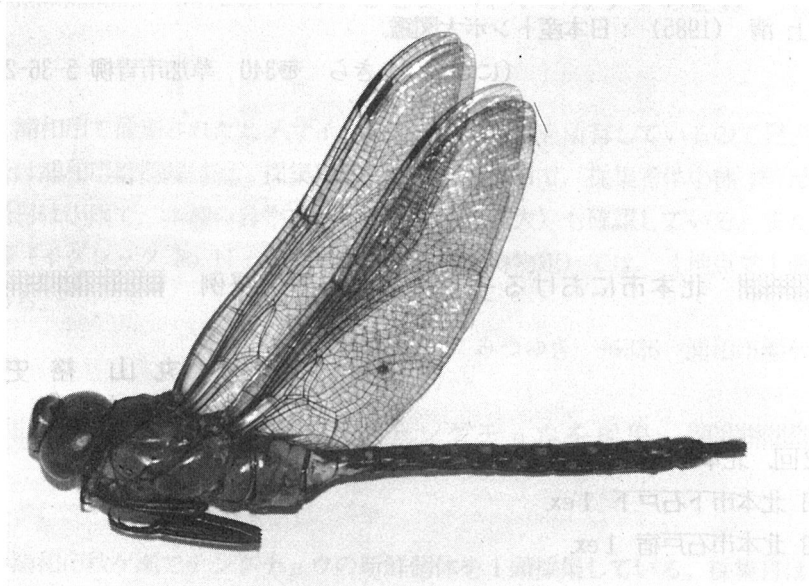


写真1 採集個体

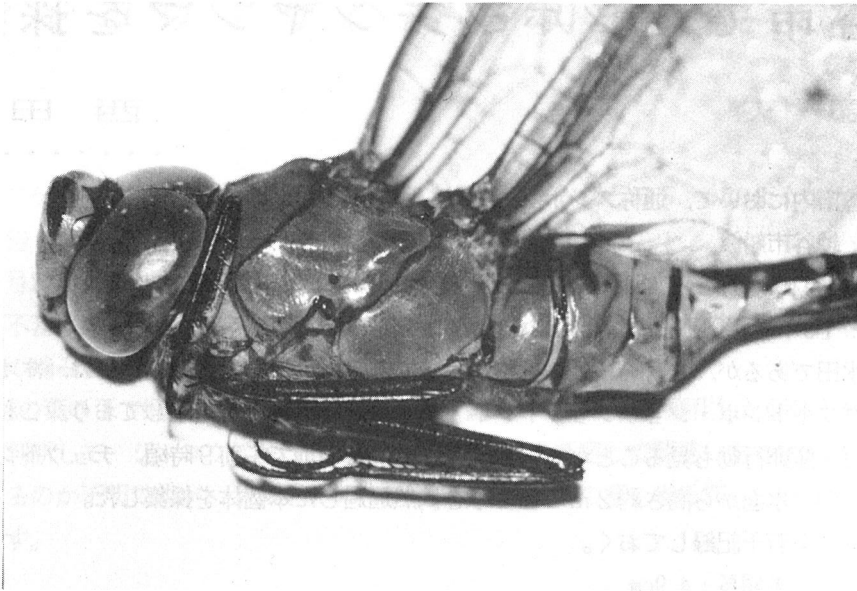


写真2 採集個体 頭胸部拡大像

なお、報告を勧めて下さった碓井徹氏に感謝いたします。

[参考文献]

日浦 勇 (1968) : 謎のギンヤンマ, *Nature Study* 14(10) : 12-15.

浜田 康・井上 清 (1985) : 日本産トンボ大図鑑.

(にしだ あきら ㊞340 草加市青柳 5-36-21-203)

北本市におけるモンキアゲハの目撃例

丸山 裕史

筆者は、今夏に2回、北本市内でモンキアゲハを目撃しているので報告する。

1992年8月20日 北本市下石戸下 1ex.

1992年8月29日 北本市石戸宿 1ex.

(まるやま ひろし 上尾高校生物部OB [㊞362 上尾市浅間台 1-61- 上尾高校])

消えた国立市多摩川堤のホソオチョウ

中村 英夫

昨年8月、東京都国立市谷保の多摩川堤防でホソオチョウを発見したことを本誌に報告〔寄せ蛾記 (61) : 1183〕したが、その後の当地における本種の消長を見届けたので記録しておく。

昨年の発見時、これまで見たこともないほどの夥しい成虫が文字通り乱舞しており、食草上にも多数の幼虫や卵塊が見出だされ、ホソオチョウの天国になるように思われた。そこで今春、4月27日(天気は快晴でとても暖かい日であった)に、美しい春型成虫と飼育材料を得るべく同地を訪れたが、幼虫も卵も見ることが出来ず、成虫1♂のみを得た。さらに中央高速の橋梁付近から京王線中河原駅付近までの左岸をくまなく探し、ウマノスズクサ群落を数箇所発見したがいずれの場所でも各ステージの本種を発見することは出来ず、ギンイチモンジセセリを採集できただけであった。

諦めることなく本年8月9日(やや風の強い晴天)、再度同地を探索したが、昨年のできごとがウソのような静寂の世界がひろがっており無傷のウマノスズクサだけが風にそよいでいた。

因みに3日後の12日、都内文京区本郷の東大キャンパスを訪れてみたが、ここでもホソオチョウは姿を消しており、代わってジャコウアゲハの卵、幼虫および成虫が見られただけであった。

やはり新参加者が定着して根をおろすのは難しいのだろうか?

(なかむら ひでお 〒607 京都市山科区竹鼻地藏寺南町 16 A2-37)

浦和市におけるヒメマイマイカブリの記録

渡邊 光行

筆者は、浦和市で採集されたヒメマイマイカブリの標本を所有しているので発表しておく。

採集場所は浦和市総持院付近、採集日は1992年5月31日で、採集者は小林 洋介氏である。

採集日当日は小雨で、本種の食物であるカタツムリ(大)も確認している。また、1991年の同所付近の調査記録(イグレット No. 11; シラサギ記念自然史博物館)では、4地点で1個体ずつ確認されているようである。

(わたなべ みつゆき ☎336 浦和市瀬ヶ崎 2-14-8-105)

浦和市でテングチョウを採集

渡邊 光行

筆者は、浦和市秋ヶ瀬でテングチョウの新鮮個体を1頭採集している。採集日は1992年6月6日で、標本は筆者が保管している。

(わたなべ みつゆき ☎336 浦和市瀬ヶ崎 2-14-8-105)

上尾市におけるクマゼミの観察記録

碓井 徹

- 筆者は、1990年と1992年の夏に、上尾市の自宅付近でクマゼミの鳴き声を聞いているので報告する。
- 1) 1990年：7月30日の午前中に、上尾市老丁目にある自宅近くの森で、クマゼミが1頭鳴いているのに気がつく。7月31日の午前中にも、同じ森で鳴いているクマゼミの声を数回聞く。8月1～3日は、奥秩父に出掛けて留守にしていたが、翌4日、8：30～11：30の間に、やはり同じ森で鳴くクマゼミの声を数回聞く。4日の午後からは、恒例の当会の宿泊談話会で榛名山に出掛け、5日の夜に帰宅したが、翌日6日は快晴にもかかわらず、クマゼミの声は聞こえてこなかった。
  - 2) 1992年：8月17日の9：15（晴れ）と18日8：30～9：30（曇り）に、1990年の観察例と同じ森でクマゼミの鳴き声をそれぞれ3回ずつ聞く。おそらく1個体と思われる。19～25日は朝から自宅にいなかったため観察できなかったが、26日の9：00～10：00には、やはりこれまでと同じ状況でクマゼミの声を4回聞く。その後も、鳴いていれば聞こえて来る状況が数日あったが、26日を最後にクマゼミの鳴き声は途絶えた。

(うすい とおる ☎362 上尾市老丁目 454-3)

《短歌の紹介》

今年の6月28日（日）に、埼玉県自然保護課と当会が主催した『県の蝶 ミドリシジミを観る集い』に参加した方の短歌が、雑誌『作風』平成4年10月号に7句掲載されました。作者の承諾を得ましたので紹介させていただきます。

(紹介者：市川 和夫)

榛の木

小川 恵美子 浦和

県の蝶ミドリシジミを観る集い自然公園ハンノキ林  
 梅雨はれま榛の木洩れ陽キラキラと夕暮れを待つ人らを包む  
 県南の水辺のほどり魅せられて生きた宝石飛び交ふを待つ  
 榛の木の枝をたたきて瑠璃いろの乱舞のさまを待つ梅雨日暮れ  
 ゆたかなる追憶の森保護されし野ばら野苺牛蛙のこゑ  
 「調査後はミドリシジミを放します」メス個体数の割合調査  
 枝渡りするオス蝶の巴舞ひ逃さず捕らふ昆虫少年



## 【訂正】

☆ 寄せ蛾記64号 『埼玉県の興味ある双翅類(4)』のミスプリントの訂正

- p. 1335 上から16行目 ;  $R_5$ 径分脈 ⇒  $R_5$ 径分脈  
 上から18行目 ; 中-肘横脈 ⇒ 中-肘横脈  
 下から3行目 ;  $R_5$ 径分脈 ⇒  $R_5$ 径分脈  
 下から2行目 ; 後脚と脛節 ⇒ 後脚と脛節

p. 1336 図の説明部分

3. cerci, ..... ⇒ 3. ♂ cerci, .....  
 4. 交尾器 ⇒ 4. ♂ 交尾器  
 5. 交尾器先端部 ⇒ 5. ♂ 交尾器先端部

(訂正 ; 玉木長寿)

☆ 寄せ蛾記64号 『狭山丘陵のオオムラサキ』のミスプリントの訂正ならびに追加

- p. 1350 上から6行目 ; 観光開発 ⇒ 観光地開発  
 上から14行目 ; 目を向けていただけたりしたら ⇒ 目を向けていただけたとしたら  
 下から14行目 ; 水源灌養林 ⇒ 水源涵養林
- p. 1351 上から1行目 ; 遊歩道沿の等が ⇒ 遊歩道沿い等が  
 上から3行目 ; テリトリーをつくり ⇒ テリトリーをつくり  
 上から6行目 ; 「所沢三ヶ島の昆虫調査報告」 ⇒ 「所沢市三ヶ島の昆虫類調査報告」  
 下から1行目 ; 埋もれているもと ⇒ 埋もれているものと
- p. 1353 上から10行目 ; それと, ⇒ それも,  
 下から11行目 ; 枝打ち伐採 ⇒ 枝打ち伐採, 下草刈り
- p. 1354 上から5行目 ; 古から知られ, ⇒ 古くから知られ,  
 上から9行目 ; 個体数でしか ⇒ 個体数しか  
 下から12行目 (参考文献の項) ;  
 所沢市三ヶ島の昆虫調査報告 ⇒ 所沢市三ヶ島昆虫類調査報告  
 下から2行目 ; …話しもある。 ⇒ …話もある。

(訂正 ; 玉木長寿)

◇ 編集長より ; 前号64号は, ことのほか入力ミスが目立ちました。お詫びします。

## 寄せ蛾記 65号 目次

大野 正男	：渡 正監と「日本産蝶類図説」	1373
新井 裕	：三品川(埼玉県寄居町)におけるトンボの生息分布 I	1377
井上 尚	：パソコン使用による個人標本データベース私案	1383
雛倉 正人	：八潮市の汽水域に生息する甲虫類	1388
中川 利勝	：たまむし と ぴかぴかむし	1390
内田 正吉	：寄居町中小前田付近の蛾 (その2)	1392
内田 正吉	：埼玉県におけるエゾスズの分布	1398
荒木 崇	：詩にあらわれた蝶 (2)	1399
小田 博	：埼玉県産甲虫類の分布資料 [1]	1402
板橋 一好	：千葉県我孫子市でオオミドリシジミを目撃	1404
萩原 昇	：ミドリシジミ雌の多型現象の謎	1405
萩原 昇	：ジャコウアゲハ終令幼虫の観察から	1406
西田 彰	：越谷市でスジボソギンヤンマを採集	1407
丸山 裕史	：北本市におけるモンキアゲハの目撃例	1408
中村 英夫	：消えた国立市多摩川堤のホソオチョウ	1409
渡邊 光行	：浦和市におけるヒメマイマイカブリの記録	1409
渡邊 光行	：浦和市でテングチョウを採集	1409
碓井 徹	：上尾市におけるクマゼミの観察記録	1410
(市川和夫)	：短歌の紹介	1410
	訂正	1411
	新入会員紹介など	1412
	会報	1412
	編集後記	1412